とある白井黒子に憑依

真戸あかり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある白井黒子に憑依

【Ｎコード】
Ｎ３７８５Ｔ

【作者名】
真戸あかり

【あらすじ】
平々凡々な高校生が起きたら、憑依してました。とある茶髪ツインテ・テレポーターの女子中学生に。
と、とりあせずお姉様にセクハラ、じゃない愛情（と欲望）のあふれた抱擁を！って、痛いです、電撃。
ここはとある世界の物語。
救いきれない深い闇もあった、学園都市での物語。

とある1　ひょういっ！

人間、平均で人生の1／3は眠ってるんだってね。
だから、寝て、起きたら違う世界に行く確率も少なくはないよね。
だって、3回に1回だもん。
3回も体験したことないけどさ。

死んだらどうなるって知ってる人、いないしね。
臨死は、生き返ってるのだから、本当の死じゃないし。どっちかっていうと、睡眠によく似てる。
って、寝ぼけた頭で何考えてるんだか！

現在、知らない天井どころか、知らない部屋、知らない布団、そしてよく知っている体になりました。

嗚呼…。とある男の肉体変化、って、いうことなのかな??

昨日までの中肉中背のごくありふれたる高校生の男の体から、
ひげの1本もないつるつる、すべすべのぴちぴち女子中学生になっているとは！
昨日寝る前に見ていたアニメのキャラそっくりです。

この貧相な、空気抵抗の少ない軽くしなやかな機能的なボディ。
普段のツインテールをほどいた栗色の長髪。いまは下着とお揃いの薄紫の刺激的なベビードールを着た…

なんで、白井黒子なの！ですの！

独特の口癖が難しいってばっ！！

憑依、したんだよね。いま、周りを見ても寮の中っぽいし、布団もベッドも女物だし。動かした腕は細くて華奢で、手のひらだって爪だって小さくって、どう見ても女の子のものだ。
こういうのって、最初に神様とかが教えてくれたりはしないの？ねえ、お願い聞いてくれたり、特別な能力は？？

…不幸だ。

ふっくら柔らかい小さな唇でため息をつく。
なんのヒントも手助けもなしですか。
即興アドリブの舞台に飛び入り参加した気分です。失敗したら…どうなるのかな。

黒子さんの評判がおちるのか。
まあ、自分じゃないから、ちょっとは気が楽だけど。でもそのせいで、可愛い女の子が変な目で見られるのもなあ…。

あ、能力！たしか黒子さんはテレポーターだったよね！よかった。
無能力じゃなかった。
あと、思い出せることは…

中学1年生。
これじゃ、この町を昼真っからブラブラしてると問題あるか。せめて高校生以上なら良かったのにな。

住まいは、ここ、寮だったっけ。
家族は同居してないからちょっとハードル低くなったけど、ルームメイトがいたんだった！
ビリビリこと、御坂美琴。怒りっぽいツンデレさんだったかな。

「なあに、黒子、起きたの？」

「んわっ！！」
びっくりしたあ。

隣から聞こえる声は、原作でよく知っている学園都市のレベル５の御坂美琴。
カワイイパジャマで寝起きで着崩しているさまは、眼福、眼福。

「どうしちゃったの？まだ寝てるのかしら」

「い、いえ、なんでもないです…起きましたよ、ほら」

「？　へんな黒子ね。体調でも悪いの？」

やばっ、中身が男で、少女の体を乗っ取って、そのベッド勝手に使って、寮に不法侵入…自分から進んでしたわけじゃないけど、この状態でばれたら牢獄か電撃か…とにかくろくな事にならないっ。本能がそう言ってる。
と、とりあえずごまかしとこう！

「や、やですわ　お、お姉様（こんな言葉遣いだったよね、たしか）

黒子は寝不足で…そう！お姉様の寝顔を見ていて、睡眠時間が少なくなっただけですの」

こう言ったら美琴の表情は、違和感を感じていたいぶかしげな顔から、変態を見るような絶対零度の顔になっちゃった。
怪しまれなくなったのはいいんだけど、その視線ちょっとつらいかも。

「昨夜、何をしていたのかは、あえて聞かないであげるけど…早く着替えないと遅刻するわよ」

「わ、わかりましたわ、お姉様」

そう言って目の前で脱ぎ出す美琴。
着替え、もちろんのぞきましたとも、同性ですからね！ヲホホ。
パジャマと同じキャラのかわいいカエル柄でした。とだけご報告いたします。

自分の寝間着のほうが刺激的なはずなのに、寂しい思いをするのは、胸のせいなのかな。かな。

それにしても朝立ちのない体って、隠すこともなく楽だけど…なんていうか、
かつてあったリビドーの固まり（元気と欲望のバロメーター）がないとちょっぴり不安。おまたがスースーします。

…夢なら、覚めて欲しい。

とある１　ひょういっ！（後書き）

２０１１　６／４　改訂

とある2　夢じゃなかった

やっぱり、夢ではないようです。

「くーろーこーーー！！どこ触ってんのよ！」ビリビリビリ

「あああああああいぃあああ」

あのあと、いつもの黒子がやっていたであろうスキンシップがわりのボディタッチをして、
つい胸の先っぽまで手が伸びたところで電撃をあびました。

現実だってこと、しびれるほど体感しましたとも。グスン。
やわらかかったですよ！自分のより！！ちくしょう！

ま、これくらいはいつも黒子さんがしていたから、大丈夫だよね。
しないと、また疑われちゃうし。うん、そういうことにしよう。だって、ラッキースケベって、したいでしょ。したいよね！

「馬鹿なことしてないで、早く顔洗ってきなさいっ！」
「は、はいーっ」

急いで洗面台に行く。
顔を洗って、さて準備でもというところで、固まってしまった。

…そこに置いてある化粧品を見て、焦る。

メイクなんてしたことないから、わかんないよっ、と。

すっぴんで何とかなる中学生で助かった！
髪はこんな感じだったかな…。適当にヘアゴムでまとめて、ちょっと櫛でとかして終了。ドリルヘアじゃなくってよかった。
そんな適当でも、鏡に映った私（白井黒子）は化粧をしなくても十分カワイイ。自画自賛というなかれ。

過剰なスキンシップで倒れた間に時間が過ぎてしまった。早く、ささっと着替えて準備をせねば。
服のある場所でちょっと悩んだけど、さっき、お姉様の着替えを見ていたので、制服の場所もわかった。
１部屋しかない場所で、お姉様がつかっていないこちら側のクローゼットの同じようなところを漁ればなんとかなりますよね。
そ、そのために見てたんだからね！

クローゼット内の下着コーナーを凝視してしまい、時間が一番かかったのはここだけの秘密。
女子中学生の下着が…ここはパラダイスですか！？
ぬおっ！縞パンなんてありません。
なんで、スケスケやヒモや０バックばっかりなのさー！？普通のはないのかー！！

「黒子、いつまで着替えてるのよ。もう、先行ってるわよ」
「おまちください、お姉様っー」
置いて行かれると、困るんです。
「ちょっと黒子！スカートの横、ファスナー空いてるわよ」
あ、下着のサイドのヒモが丸見え…

「み、みせてるんですのよ、お・ねえ・さまっ」うふっ
とかやってみる。
自分の姿では想像しない。しないったら、しない。今の私は黒子さん。だから、恥ずかしくないやい！
こちとらスカートなんてはいたことないから、分かんないですよっ。

「だらしない格好してると、また寮監にしかられるわよ」
そう言ってファスナーを上げてくれた。美琴お姉様ありがとう。意外だなあ。ツンツンしてても、優しいんですね。
そんな優しさにちょっとときめいちゃう。

変態性癖のある黒子さんだけど、お姉様以外では品行方正だったはず。
本当は休んで調べたいことがあったけど、ばれて捕まったりするのも嫌だし、もし本人が戻ってきたときのために、一応学校は行っとこうかな。

とある2　夢じゃなかった（後書き）

2011　6／4　改訂

とある3　授業中

朝食をとって校舎にいくまでの間、寮の人とすれ違う。
「おはようございます、お姉様」
「おはようございます、皆様がた」
皆さん優雅にご挨拶してくださる。朝って、忙しくないの？それで間に合うのかなあ…
なんて世界の違う風景なんだろう。不公平だよね。

美琴さん以外に人が沢山いたので、もしかしてほかに憑依してる人はいるのかなあ？って、きょろきょろ見渡してしまった。
でも、見分ける手段や能力が無いから、どうやったら見つかるのか分からないことに気付く。なにやってんだか、もう。ああ…不幸、かも。

まあ幸運にも憑依してる人を発見してお話できたとしても、『どうやって憑依したの？』とか『いまの憑依ライフはどうなの？』しか話すこと無いんだよね。
『しらん、ふつう』とか言われるとへこむなあ。まあ、こっちも聞かれるとそう答えるしかないんだけどさ。

そうこうしていると、授業が始まるそうなので学舎に全員移動。お嬢様学校の学生だもんね、当たり前かな。

「じゃあ、黒子しっかりやんなさいよ」
「は、はい…ですのっ」
クラスが違うので、お姉様とは別の教室にいった。
クラス分からなくてきょろきょろしてたら、同じクラスの子らしい女の子が一緒に付いてきてくれたよ。親切だなあ。

お嬢様学校って、良いですね。

ただいま、絶賛思考逃避中。

授業中は考え事がはかどりますよね。
中学生の授業くらい、なんとかなるだろうと考えていた自分がバカでした。
あ、昨日まで普通の高校生やっていたので、通常の問題ならなんとかなりましたよ！
でも、普通の学科ならともかく、科学サイドの専門授業は…
ついて行けませんでした。なめていてゴメンナサイ。

言ってる意味がもうわかんない。

パーソナルリアリティから始まって、ＡＩＭでは拡散作用の法則性やら、力場の形成条件にいたるまでの専門授業、単語も意味不明でほとんど頭を素通り。

科学、科学と言っていても、これって、魔法みたいなものだよね。
魔法に置きかえたほうが解りやすいかもしれない。
ある日突然、あなたは魔法使いです。魔法使ってみてください。
で、これはどうやって魔法使ってるのでしょう？って魔法学校で習ってるようなものだもの…。

一応ノートはとりましたが、いまテストないのを祈るばかり。
成績下がりすぎたら、黒子さんにわるいものね。
とりあえず、ノートさえあればテスト前に丸暗記してごまかすこと

できますし。

なので、ぼーっと考える。

自分の能力、白井黒子のレベル４としての能力＜テレポート＞

なんなのさ、物体の瞬間移動って。

身体能力強化とか、火が出る、とか解りやすいものじゃない。
今までテレポートなんて使ったことも見たこともないもの！

でも、この体になって、テレポートは＜使える＞ことは、なんとなくわかる。
それを詳細にどんな原理で、どんな計算で、脳のどこを使ってなんて把握まーったくできてません。
カンです、カン。
この際、ひらきなおろう！

練習がてら授業中、机の上でこっそりとペンを右手から左手に飛ばしてみたりしてました。
初めてのテレポート、ちょっとドキドキしました。

あとで、自分自身もテレポートしてみよっと。
きっと忘れ物とか取りに行くのに便利だよね。

と、頑張ったんですよ。でも、でも…授業がつまんない。

午前中は耐えに耐えてノート取ってましたが、もう退屈で死にそう。

よく耐えたと、自分を褒めたい。

ようやくお昼休みか…
黒子さんなら学校にいなきゃいけないけど、俺にはそんな義務もナシ。もういいや。よし！どこか行こうかな。

テレポーターはどこにでも行ける。さて練習をかねて行ってみますか。

おっかなびっくり、初めて自分をテレポート。
「わわっ！うおう…」
自分自身のテレポートは成功！
うっひー、どきどきした。怖かったので、ずれてもいいように空中３０ｃｍほど上に座標指定したのはヒミツ。

何回か繰り返して、学校からは抜け出せた。距離はあんまり飛べないみたいだけど、この能力ってすごいね。
後でくわしく調べてみよう。

ま、そんなわけで外に出たのですが…。行きたい所、どころか知ってる所なんてほとんどないんだよね。
上条さんの寮や、高校くらいしか分かんないよ。もうどうしよう。

散歩でもしますか！せっかくいい天気だしね。
おや、あんなとこに公園が。たしかここって、よく御坂さんと上条

さんが会う公園じゃない？
あ、あったあった！自販機みーっけ。やっぱりそうだ、下の方に蹴り跡ついてるもん。
どんなドリンク置いてるのかな、ぷぷっ、これはひどい。ゲテモノ趣味のドリンカーが泣いて喜ぶ、危険なドリンクがいっぱい！
早速飲まなきゃね！えっと、まずはこのカレーカプチーノいってみよう。…うん、まずい！たまらん！

おや、あんなとこで紫髪の男の子が1人きょろきょろして…もしや、憑依者？
一応話してみるか。

「ぼうや、どうしたの、何かあった？」
「まよった…」

迷子でした。

おいおい、泣くなっ！
俺も迷子みたいなモノですからね、一緒かも。

「帰る場所わかる？」
「んと、あっちかな、こっち…かも」
わ、また泣く！しょうがないちょっとまってろ。
「これやるから飲んでちょっと待ちなさい」
さっきの飲みかけのドリンクあげる。
「…まずい」
だよねー。

その間に携帯を操作して、地図を表示しようと努力。ここの科学力ならそれくらい出来るだろっ。

いろいろいじってみるが、表示されない。難しいな…

これか？違ったどこだ…んーもうっ！あ、これ。で、できた。
無駄に高機能だなこれ。

そうして、その子の帰る場所の見当がついたので、歩いて向かう。
2人のテレポートはまだ怖いからねえ。

途中でクレープ屋みつける。いい匂いだ。そういえばお昼抜いてたなあ…。

ぐうう

私じゃないよ！隣を見る。こいつか。
「お腹すいたの？」
「…すいてない」ぐうううう
「…ちょっと、まってなさい」

まあ、丁度いいし、自分の分も買おう。
え！？クレープ、たかっ！高いよっ！
えっと、財布財布…ああ、まあけっこう入ってる。よかった、買える。
「その本日のお奨めを2つくださいな」
受け取って、その子にもわたす。
「どうぞ」
「いいの？」
「ん。いいよ。お食べ」
遠慮無くがっつく子供。お腹すいてたのかな。歩きながら食べる。
こっちはさっきのジュースと違って、たいへん美味しかった。

「あ、ここだ。ついたー！」
じゃあ、ここでいいのかな。
小児用能力教材開発所？覚えのある名前だな。
「家って、ほんとにここ？」
「うん。おれの家ないからさ、ここに拾われたんだ」
「そう、だったの」
…ここは、置き去り（チャイルドエラー）の孤児院、か。
黒子は1年。原作の時期と同じ…なら、もう木山春生の幻想御手事件の元になった子供を使った能力暴走実験は終わってるはずだけど一応忠告しとこう。
「あやしい実験に協力しちゃだめだよ」
「うん、わかった！」

ほかにも、いろんな実験に使わるかもしれないし。明日は我が身。お互い気をつけようなな。
こんな可愛い子達に、なんてことするんだか。

「今度は迷わないでね。バイバイ」

そんなとき、一陣の風が吹いた。

ひらり。

「じゃーねー、エロイパンツのおねーさーん！」

「か、かわいくない、ですわ…」
こ、こんなパンツしかなかったから、仕方ないじゃんかよー！
名前は聞かなかった。どうせ、知らない子だし、もう関係はないだろうし。

ちょっとやさぐれてるのかなあ。何だかモヤモヤする。
さっきの風でおちた腕章を拾った。

…ジャッジメント。

そっか、これもその活動の一部か。
気まぐれの善意が、黒子さん本人の行動と一緒だったのに、ちょっと笑えた。

1人に戻ったので、つらつらと考える。
ここで目立つと、ジャッジメントやアンチスキルに補導され、
悪いことすると、暗部に目を付けられ、
行き場がないと、孤児院で研究材料にされそうになる…かあ。

詰んでる。
つんでれら。

このまま黒子で行くしかないのかなあ。まだ中学生だから、学校止めて働くのも問題ありそうだ。
このままどこか自由に行くのも、あるんだろうけど…もしも元の体の持ち主が帰ってきたとき悲しむのかな。ルームメイトの美琴さんも。
どれだけの期間憑依し続けるのかも分かんないから。
死んだりしたら、やっぱり憑依した自分も消えるのかな…試せないな、こりゃ。
まあ、しばらくは状況見るために演技しますか。行くあてもないし、朝もとっさにやっちゃったからね。才能あるのかな？
ばれるまでは、一世一代のアドリブがんばるか！！

そんなことをしていたら、そろそろ学校も終わりの時間か…あ、メールだ。
なになに、美琴さんから帰りにファミレス行こうって？
うん、することないから戻ろうかな。

ファミレスで美琴さんと一緒に甘い物たべよう！それでさりげなく、いろいろと教えてもらおう。
甘い物は美味しかったし、まだ食べたりないや。いっぱい使った脳が甘い物ほしがってるよ～。
今まではあんまり甘い物食べなかったけど、味覚変わったのかな？

とある３　授業中（後書き）

２０１１　６／４　改訂

とある４　帰宅前の寄り道

放課後、追加の携帯のメールで確認できたけど今日はジャッジメントもなく、４人で会うことになってました！
やったね。御坂さんの後は、生・涙子と生・初春だ！うへへ。

…待ち合わせ場所には誰もいない。
早く来すぎたかな？
まあ、こっちは午後の授業さぼっちゃったから、当然か。
なら来るまで現状把握してよう。
事故とか怖いから、テレポートのことも、もっと良く知っておかないと。
さて、どうしたものか…

「黒子、ずっと考え込んでどうしたのよ」

待ち合わせ場所で待っているついでに頭の中で情報を整理していたこっちを、心配そうに見ている。
いつの間に来たのだろう…そんなに集中してたのかな。
「あ、お姉様」
「おまたせ。で、何かあったわけ？」

聞いてみようか。
「ええ、あ、そうですね。憑依…って信じます？」
「なにそれ、そんなこと考えてたの？うーん、憑依、ねえ。そんな能力者いたかしら。黒子、あんた直接ジャッジメントで調べてみたら？」
ジャッジメントか。そうだった、黒子はそんな活動もしてたよね。

「あと、オカルトなら佐天さんが詳しいんじゃないかな」
いいこと聞いた。噂でも、もしかしたらレベルアッパーの時みたいに、何かのヒントがあるかも。
「あ、ありがとうございます」

ああ、神様とかそんな存在じゃなくって、憑依能力者のイタズラとか…考えられるのかな。
でなきゃ、こんな事起きないよね！

「こんにちはー！遅くなりました」
「おまたせしましたー」

今日は常盤台中学に近いアーケード街で待ち合わせなので、こっちが早いのは当たり前なんですけどね。
さらに言うなら、私のテレポートなら時間なんてかかりませんし。

それにしても涙子さん、黒髪ロングでかわいいなあ、おっぱいもイイふくらみです。さすがに中学生なので巨乳、とはいきませんが、とても美乳！
動く度、ゆれます。４人でいること多いから近くで見れるんですけど、あれに目が釘付けです。たまりません。

「お二人は早かったのですね～」

こちらは頭のお花がトレードマークの初春さん。甘えん坊な話し方、かわいいなあ。癒やされる～。なのに、ハッカー。ギャップがすごいです。

いまは癒やされておきますが、これから情報をいろいろ聞くときに協力してもらおう。
でも、話せないこと多いから、どうやって聞き出そうかなあ。
あの話し方や雰囲気に惑わされるけど、初春さんって、たしかとても頭がいいんだよね。
黒子さんとは昔っからの付き合いだから、下手なこと聞いたらばれそう。さて、どうしたものやら。

「買い物にします、それとも甘い物でも？」
「そうねー、今日は先にウインドショッピングかな」

さっきから、ちらちらとアーケード街の一画にあるファンシーグッズ店のカラフルな怪しいカエルのポスターをちら見している美琴お姉様。
きっと1人で行くのが恥ずかしくて、ここで集合と決めたんですね、わかります。
「御坂さんの好きな可愛いものいっぱいありますからねー」
「そ、そんなことないわよ！」
「あせらなくっても逃げませんよ、御坂さんっ。では見に行きましょうか」
「いいの？」キラーン
「わ、私も髪飾り見たかったんですよね」
気が回るなあ、佐天さん。

「初春も髪飾りですの？」
一応会話に参加しておこっと。
「え？なんのことです？」
「…」
会話ノ選択マチガエタカナ

ファンシーグッズのお店の入口には　ゲコ太…と名前がついている新グッズのポスターが貼ってあった。
ちなみに期間は今日から…どんだけ好きですかお姉様。
ある日目覚めたらカエルになってても知りませんよっ。
それはそれで、嬉しがるかな～。

「白井さんポスターそんなにおかしいです？」
「い、いえ別に何でもございませんわ、それよりお姉様は…」
「はー幸せ～」
なんだかうっとりしてますよ。カエルに囲まれて。

「うふふふ」
「満面の笑みですね、御坂さん」
「ですねー。あれ、全部そうですから」
「フェアの商品片っ端から買ってたもんね。もう、いつこの店ごとくれ！店主！っていうか、どきどきしちゃった」
「すごかったですもんねー。佐天さんはいいのありました？」
「うん、私はこれ。丁度無くしてたんで買っちゃった」
美琴さんは1人で膨らんだ袋をかかえ、にこにこしている。カエルいっぱいで幸せなんだろうなあ…。
佐天さんはヘアゴムを買って、私と初春さんは見てるだけでした。
「さあて、次はお腹を満たす番ですね！」

そして、着いたファミレス。早速甘い物とドリンクバーを4人して注文。
袋いっぱいのゲコ太に夢中の御坂さんはおいといて、さっきのお店

では落ち着いて話せなかったので、ここぞとばかりに2人に話しかける。

「2人にお聞きしたいのですが、憑依現象…って、ご存じです？」
「能力ですか？うーん、ちょっと調べてみますね。」
その場で携帯を出して、調べ出す初春。

「オカルトですね！そうですねっ！とうとう白井さんもこっちの世界に。ウエルカムですよ！」
テンション高いですね、佐天さんっ。
「たまに、ネットの噂サイトでその話でるんですよねー。」
「そ、そうなのですか？具体的には…」
「えっと、たしか普通の青年が、ある日顔をはがされて、別人になっていた、とか。学校でおちゃらけてる金髪サングラスの男が、裏では悪い奴とつるんでた、とか。ピンク髪の小さい女の子が、家では酒とたばこを常用しておっさんくさい生活してるとかいろいろありますよ」
それって…ミンナ、ミラレテマスヨー。バレテマスヨー。
「だいたいが、普段から想像も出来ない行動をしているから、そう言われてるんですよね。二重人格とも疑われてるんですが、私としてはですね、憑依とか、ドッペルゲンガーって説を押しますね」
「へえ、そうなんだ」
「だって、その方が面白いじゃないですか！ですよねっ！」

「し、白井さん、足っ！！」
携帯を触っていた初春さんの手が止まってる。
「へ？足がどうしたの？」
足を見る。普通だよ、2本ともついてるよ。
「足、ひらきすぎです！ちゃんと閉じないとみ、見えちゃいますよ」
赤くなる初春さん可愛い。じゃなかった、いかんいかん。今の私は

女だったんだ。
「あ、ごめんね」
あ、まずいまずい、どうりですーすーすると思った。スカートってなれないわあ。その下スケスケだし。

「そうそう憑依って言われるの、ちょうど今の白井さんみたいなカンジなんですよ」
「普段しない行動を取り出す…ですね」
やばっ！俺ぴーんち。
「そ、そうなの…ですの？」
「「もしかして、白井さん…憑依、されてます？」」

どきっ！！！！

「な、なにを言いますやら、あ、ちょっとおトイレ、じゃなかったお花つみに…」
とりあえずトイレに逃げよう！
「あ、私もいきますよー」
佐天さん、ついてこないでー！早く行って個室に逃げ込もうっ！！
「ちょ、白井さん、そっち男子トイレ！！」
わわわ！いつものクセでまちがえたーーー！！

はい、女子トイレ、初めて入りましたよ…緊張しててよく見なかったですけどね…
とにかく、個室に逃げ込むことに成功。
ふーー。ちょっと一息。
「白井さん、私さきに戻ってますね」

その後しばらくトイレにこもって、考える。
どうしよう、どうしよう。ばれたかな？疑われた、かも。

もし憑依ってばれたら、拘束、実験、解剖…ひえええ。どうしよう！
頭がぐるぐるする。とにかく、今はばれないようにするしかない、か。

いつまでも隠れていられないので、しかたなく席に戻る。

甘い物はもう机の上に運ばれていた。
「ドリンク、いつものを酌んでおいたわよ」
机の上に置いた沢山のカエルにご満悦のお姉様は、ようやく復活したらしい。
「あ、ありがとうございます、の」

「どうしたの、黒子。何か悩み事でもあるの？」
「あ、いえ、そういうわけでは…」
「そうだ、さっき調べた憑依能力者なんですけど、該当するのはレベル3の半径5m以内の動物をコントロールする遠隔操作（リモートコントロール）とか、意識を逸らす能力…これはちがうか、あとは心理掌握（メンタルアウト）くらいでしょうか」
「どれも微妙ねえ」
「ですよね。憑依っていうと体の乗っ取りなわけですから、距離や精神感応とは違うと思うんです。レベル1や2に関しては近い能力があっても、精神抵抗がある人間には憑依に近いまでのことはできてないですね」
携帯の情報を見ながら、初春はそうしゃべる。
「あと、肉体憑依（ボディスナッチ）という、そのままずばりの能力者は、数年前に死亡が確認されてます」
「あちゃー、それじゃあ手がかりなし、かあ。やっぱりオカルトかな」
「どうしてなの？」

「じつは、その人が生き返って、夜な夜な人に乗り移ってる、とか…あるんじゃない？」
佐天はにんまりと笑い、長い黒髪を顔にかけて初春をおどす。
「さ、さてんさん、それは、ななないですよっ、ですよね、御坂さんっ！」
「そ、そうよね、この学園都市にそれはさすがに、ねえ」
「そうですかねえ…じつは、さっきお話しませんでしたけど、続きがあるんです、それは、ですね…」
声のトーンが下がって、雰囲気を作り出す佐天。
美琴は手元のカエルが変形するくらいぎゅっと握っている。初春はすでに涙目だ。
「その死んだはずの人を夜中に見かけると呪いがあるんです。そのあとにですね、なんと…」
「「ひゃーーー」」

「あれ、この話は怖くなかったですか」
ホラーの話になったあたりで、参考にはならないと思ってぼーっと考えていたとき、不意をつかれた。
「今日の白井さんは何だかおかしいですよ？」
ばれた！？やばっ！！
びくっとした。
「ま、まあ女の子だもん、体調悪い日だってあるよ、初春」

「そ、そうですね！…白井さんごめんなさい」
「今日はお腹冷やさないように早く寝ないとね、黒子」
「？？」
なんのことやら。

うん、ガールズトークって、スゴイね！ついて行けませんでしたよ！！

結局、寮の門限いっぱいまでお話しをしました。

帰宅したら、お楽しみはお・ふ・ろ。
あれ？なんですまきにするんですの！？

とある４　帰宅前の寄り道（後書き）

２０１１　６／４　改訂

とある5　テレポ練習

縄と布団からテレポートで抜ける私。よっしゃ、成功。
やっぱり、エロがかかると真剣にもなるってものよね！

初めてのお姉様との夜ですものっ！

…緊張。

お風呂、美琴さんが入ってる。まだすまきにしてるって思って、油断してるはず。
お風呂場から、シャワーの音がする。あそこにはっ！一糸まとわぬピチピチギャルがっ！！全裸でっ！！！

のぞいてしまおうか…
いや、そんなことしちゃ　　…いいよね、のぞかないと
だめだって　　…のぞかないと！

うん、からだが勝手に。仕方ないよね。

脱衣所で、すでに上がったバスタオル姿の美琴さん発見。

悩んでる間に出ちゃったみたい。

「くーろーこー！！！！やっぱり覗いたわね！」ビリビリビリッ
「あひゃあああうあうあうあうあああ」

電撃いたいです。

しびれが治まって、今度は私のお風呂タイム。
○○○がっ！○○○○なの！！
○○○って、そんなに○○○○っ○○○○○あっ○○○！！
いろいろ、刺激がつよいですよっ。スッキリしました。ええ、いろいろと。

夜、電気を消しベッドに横になって寝るときに、ふとひらめく。
憑依。
もしかして自分の能力かも！？うおう、いいこと思いついたこのアイディア。憑依できるか美琴さんが寝込んだトコで試してみよう！
レッツ実験。

ちらりと顔を見る。よし、熟睡してるみたいだ。
寝てる美琴さんの顔の近くで始める。
うむむむ、念じても、変な呪文唱えても駄目。
あとは、階段から落ちて頭ごっつんこくらいしか思いつかない…
あ、まつげ長いんだな、いい匂い。唇も綺麗だな、なんてどんどん近づいて見とれてしまう。あと少しで唇に…
「黒子…」
そうしていたら、美琴さん、目、あいてんのね。それも半目で睨みながら…　こわっ！

「ひえっ！！」

「人の寝顔ずっと見といて、何してんのよ」
「な、なんでもございませんの。そう、これはつまりですね、あの、見とれてましたの、おほほほ」
「…早く寝なさいよね」
そう言って反対側に寝返りをうち、背中を向ける美琴。

「は、はいですの…」
うわー、緊張したっ！また電撃くらうかと思った！

ベッドの下をふと覗くと、今日買ったぬいぐるみのカエルと目があった。カエルにもにも睨まれてるようだ。
寝よ寝よっ。

…

寝れない。

…まあ、隣に女の子がねてる、そして自分も女の子。こんなシチュエーションで熟睡できるのは超鈍感男くらいなものですよ。
クンクン。うん、お布団いい匂い。女の子ってこんなにいい匂いのものなのかなあ。
うーん、どうしたものか。

「お姉様」コソッ

すでに深夜。深い静かな寝息が聞こえ、もう熟睡したであろう美琴に小声で話しかける。背を向けて見えない顔を上から覗く。
カワイイ寝顔だこと。上条さんに見せたら一発で落ちそうなのに、見れるのは俺だけ。
ちょっと優越感。フフフ。

寝顔に笑いかけるなんて、黒子さん本人のような変態行動。
しっかり寝顔堪能して、美琴ちゃんパワー充電完了。
ちらりと胸の谷間見ようと思ったけど、子供パジャマはボタン上まできっちりあって、ガードが堅いわー。
ま、いっか。まだ機会はありそうだし。

そうやって、欲望の赴くままに美琴さんが寝ているのを確認。その後こっそりとルームシューズを履いて、今日迷子と会った、人目のなさそうな大きめの公園へとテレポート。
あそこ、あんまり人がいなかったはず。練習するのにもってこいの広さもあるし、昼間通ったときに目星つけといたんだよね。

テレポートは昼に校舎から抜け出したときに、だいたいの距離と集中のコツはつかめたけれど、まだ慣れないな。
せっかくある能力だもん。使えないのはもったいない！ということで、能力をここで詳しくチェック。

何回できるか、短縮できるか、精度は…など、退屈だった授業中に考えたメニューを試してみる。
最初の方はテレポートに慣れるまで緊張してたのか、体の力が抜けきらなくって着地に失敗してよろけたけれど、それがなくなったらテレポートに感動。
すごい！すごい！
これで、物流界の王になる！なんてね。

気分が高揚しちゃった。

さすがに連続してやっていたら、集中力がきれはじめて、座標のズレがひどくなったりしたけれど、試した結果はほぼ感覚にズレはなく想定どうりだった。

感覚がずれていると、調整が大変そうだったので、ドキドキでしたよ。集中力で精度が左右されるのも重要な要素。分かって良かった。失敗すると大惨事になっちゃうもんね。

「ふう…」

一息つく。

能力があっても使いこなせなければ、憑依してることを誤魔化しきれない。ばれちゃうと色々面倒なことになりそうだし。

なにより能力を使った、ドキッ！お姉様の体温が残る下着がわたくしのポシェットに瞬間移動！とか、お姉様のシャンプー中にシャワー室にこっそり忍ぶ性感マッサージ師！とか、様々なプレイの変態行動ができなくなっちゃう！！

ほっとしつつも、これからの自分のためと、いろんな事件に巻き込まれるであろう黒子と、まわりの知り合いのために能力強化を試しておこうかな。

ばれたら逃げるためというのが、一番の理由なのが泣けるけど。親身になって相談を受けてくれた恩もあるもんね。

一応体を借りている身として、黒子さんのかわりに大事な人たちを傷つけたり、死んだりなんて、させないよう努力してみるよ。ね、黒子さん。

自主練は、日課にするかな

さあて、帰ったらシャワー浴びてこのボディをまた隅々まで確認して、お姉様の寝相でおこるであろうワンダフル・アクシデントを堪能しつつ記録して寝るとしましょうか。ふあああぁ。

とある5　テレポ練習（後書き）

2011　6／4　改訂

とある6　とある深夜の自主練習（トレーニング）

朝のお姉様とのワンダフル・アクシデントは、どうやら選択肢を間違えて黒こげ1。
学校帰りのさりげないパフェスプーン交換も、佐天さんに見られてお姉様から黒こげ2。
ジャッジメントの内勤では、お姉様いらっしゃられなかったので、初春さんとキャッキャウフフ。愛情示威行為（アブノーマルタッチ）はお姉様にだけだもんね！
夜の宿舎でのシャワーイベントは、タイミングミスって、熱湯シャワー&黒こげ3。
全部失敗…まだまだ修行が足りませんでしたわ！黒子、不覚ッ！！
なあんて、黒子さんになるのもちょっと慣れてきた気がします。

「黒子」
「白井さん」
そう呼びかけられるたび自分は『白井黒子』なんだな…と、鏡を見なくても気付かされる。
黒子と扱われていると最初は演技しなければ、と思ってたことがだんだん違和感なく演技を意識せずに、自然に動いている。
着替えだったり、お風呂やトイレとか性別の差がでるとこは、さすがにまだ慣れませんけどもね。

でも、それでさえずっと少女の体でいると、それも普通になってくる。最初はいろいろドキドキしたものだが…いきり立つモノないと、こうなっちゃうのかな。
まるで、去勢された馬のようにおとなしくなっちゃう。
決して、胸のカップが男の自分とがかわらないから、とか（バスト

…つまり胸囲は華奢な黒子さんより俺のほうが大きい…）揉み心地がないから、とかではないのですよ！きっとね！

人は与えられた役割を無意識に演じる者といったのは誰だったか…。不思議なことなんだけど、そうなってきてる。

そんなふうに環境に流されている自分がいる。

憑依のことは調べているけど、この前のファミレスでの初春さんの調査以上のことは分からなかった。

他に判別する方法もない以上、このまま黒子さんとして振る舞うのが良いのかもしれないなあ。周りに気を遣いすぎて、ちょとため息出ちゃう。

上条さんが記憶を失ったときって、こんな感じで不安だったのかなあ。

なので修行&考えすぎのストレス解消がてら、昨日よりも力のはいる深夜の自主鍛錬。

テレポートは、相手の空間と入れ替えるなら、アポーツ（取り寄せ）になるかも？と、いつもの公園で考え中。

脳に米粒大の血栓一つで倒れたり、肺にコップ1杯の水が入るだけで人間は死んじゃう。テレポートって、なにげに凶悪だよね。

空間指定のテレポートと、物品単位でのテレポートは、似ているようで全く違う。

見た目に変わりはないけれど、移動を阻害されたときに、よくわかる。

私はどっちだろう。

阻害されたときの詳細を知りたくて一方通行（アクセラレータ）さんにお相手願うのは、死への片道超特急だし。そこはあきらめよう。

何度も夜の自己練と、授業中の机上のペンなど文具乱舞で、だいたいつかめてきた。
触ってるモノなら、人間サイズを８０ｍほどとばせそう。集中力と、距離、重量でズレがひどくなるみたい。
残念ながら、転送先の空間を押し上げてるので、転送先のモノはもってこられない。…今は。
レベルがあがれば、また違ってくるんだろうなー。

これを解きほぐせば、もっと使い所が多くなるはず。せめて黒子さん本人の分は手伝いたい。
これからいろんな事件に巻き込まれるのだから、能力は強化したい。
学校、ジャッジメント、女の子かしましコミュニケーションタイムと、なかなか時間はとれないので、睡眠時間を減らして、こっそり考察中。
せ、成長がへったら、ごめんね黒子さん。特に、胸の辺りの…
ちらっと見る我が平原。うむ、早く丘陵に、いえ、夢は大きく広大な山脈に育たぬものか。
また思考がそれてしまった。

動く相手に皮膚に食い込まないように、服にだけ鉄矢を挿すのは高等テクニックなんですよ、と。

もともとの黒子さんはさすがレベル４だけあって楽にこなしていましたが、私は刺さるんじゃないか、うごくなってばっ！って動揺してしまいヘタです。慣れてないしね。この間も犯人の太ももに３本ほどかすらせてしまった。
大怪我にならなかったので始末書までいかなかったのでホッとして

るけど、どうなることやら。早く慣れなきゃ。

う、厭なこと思い出しちゃった。

憑依して初めてのジャッジメントのこと。

学園都市って、なんでこんなにチンピラいるのかなあ。だいたい、こいつら肩書きが学生って嘘でしょうに。どんな学園荒廃！？

そんな目つきの悪い、頭をカラフルに染めた体格のいい入れ墨の野郎どもが脅迫行為をしているとの通報で、初春と出動し注意を呼びかけた。

そこまでは初春さんの後ろについて、教えられたようにするだけでよかったのだけど、奴らジャッジメントにまで暴力行為をしてきたの。

数人はナイフで。残りの数人は力を強くしたり、火炎を出したりと能力使ってくるので、ついやってしまった…。

ナイフを持っていた者の手元に鉄矢を飛ばして相手の腕に刺し、火炎を飛ばした相手には、避けたときに炎がついた看板を顔面に容赦なく飛ばして一緒に燃やした。

力を増幅してた人は…一緒に炎に巻き込んじゃったてたかも。

「し、白井さん！！」

「まったく、言葉で言ってもわからないのなら、体に教えないと行けないとは…動物ですの？」

脅してるのなら、同じコトされてもイイの？そうナイフを突きつけて脅し返したら、初春に真っ青になって止められました。

「白井さん、やりすぎですっ！」

「やりすぎなのは、あちらでしょうに」

「でも、ジャッジメントはやり返してはだめなんですっ。暴力を止

めるのに暴力なんて振るってはいけないんですよ」
涙目で言われると、それ以上は言い返せなかった。そして、初春からしかられてる間に他のジャッジメントの応援が到着して、傷つき無力化したチンピラどもを拘束した。

「白井さんはすぐ1人で飛び出すんですから、気をつけて下さいねっ！」
「初春、おそいですもの…」
「でも、2人で組んでますから、置いてかないでくださいよう。白井さんにもしもの事があったら、嫌なんです」

そうだよね、この体の持ち主を心配してくれてるんだ。俺はこの体に憑依して間借りしてるだけ。
なら、ちゃんと無事に返さないといけないよね。いつになるのか、わかんないけどさ。
固法先輩にも助けられたが、やはり注意を受けた。
「反撃しては駄目じゃない。過剰制圧はこちらが逮捕されるわよ！だいたいコンビは何のためにあると思っているの？いくら能力があると言っても、相手も持ってるのよ。突出して1人でいくのは危険でしょ。だから過剰防衛なんてことになるの！わかった！！」
「は、はい」
勢いにおされて、謝ってしまった。
でも、何でこっちだけルール守らないと行けないのかなあ？おかしいよね。

自己嫌悪。ああ、上手くやってると思ったのに。…不幸だ。

自主練続けて、飛ばした鉄矢を拾い集めながら、そう考えてました。

「よう、何やってんだ、子供がこんな時間にうろついちゃダメだろ」
「あら、上条さん」
不幸仲間発見！
とっさに名前を呼んでしまったけれど、さすがに類人猿などとは呼べませんっ。
「俺のこと、知ってんのか？」
不思議そうな顔をされてしまった。このときって記憶喪失していたのかな？それともまだ知り合う前だったっけ？やばやば。平然とスルーしとこう。
「常盤台中学1年、ジャッジメントの白井黒子ですの。子供ではありませんわ」

「中1はお子様だろう、ジャッジメントが深夜徘徊とはねえ」
「これはあくまで、超早朝！のトレーニングですの」
「は、早すぎだろう？」
ですわよね。
それにしても、上条さんもなんでこんな時間に…何かトラブルに巻き込まれていたのかなあ。巨乳長剣お姉さんとか。吸血鬼とか。

「私は健康的な鍛錬ですが、そちらは何をなさっていたのです？」
「あ、えーっとな、人助けっていうか、追いかけっこっていうかな、そんなとこだ」
「深夜のマラソンでしたか」
「そうとも言うかな」ハハハ…
言えないことだったのですね、ま、そんなことだと思いましたわ。

「ところで、さきほどからわたくしの胸部を見て残念そうなお顔をなさってるのは、何故かしら？」
「い、いや、上条さんは別に…」

「見てないっておっしゃるおつもりですか？視線バレバレでしてよ。
まあ、お子様の胸など見ても楽しくはないでしょうけど、胸はこれから増量するからいいんですの。いざとなったら、パットでもジェルでもシリコンという裏技もあることですし」
「天然が一番だろっ。親からもらった体に怪我でもないのにメスを入れるなんて許しません事よ。そんな幻想を壊すものなど、ぶち殺す！」
「それについては同感ですわね」
おー！リアルで聞けた！すごい、すごい！ついはしゃいじゃう。
「だろ？やっぱさわり心地が違…」
「触ったこと、ございまして？」
「と、思うんですよ。上条さんとしては」
あ、がっくりしてる、面白い人だ。

それから、色々話した。
大食い同居人の苦難の食生活話とか、黄色と青の髪の人の学園面白話とか。

でも、根底に流れる不幸でも曲がらず人を妬まない、真っ直ぐな気持ち。
そう、だよね…。わかる、わかるよ上条さん。

「白井って、話やすいんだな。同性のダチとしゃべってるみたいだ」

やばっ

そ、そんなことはないですのよ、ヲホホ
「でも、早く帰らないと成長しないぞ」
どこ見て、いいやがりましたか？この男。
「よいしょっと。じゃあ、上条さんは家に帰るとします」

ベンチから立ち上がって家路へと向かう、つんつん頭のヒーローさん。

「これからにご期待くださいな、ではお休みなさいませ」

にぶちんのくせにやるな。

上条さん、私にフラグは立てないでね！

とある7　ジャッジメント

睡眠不足だー。
ねむいっ。
昨日は上条さんに会えたんで、調子に乗って朝日が昇ってくるまで続けちゃった。
深夜のトレーニングで筋肉痛にはならなかったから、この体はいいポテンシャルなんだろうな、と思う。
男の体に比べて筋力は少ないけれど、能力の使い方次第で解決しそう。
接触した相手を問答無用でひっくり返すなんて、素人なのに合気道の達人になっちゃう。
これはひどいチート！

そう思っていた時が、私もありました。
この世界、甘くないよね。

この日もジャッジメントがありましたの…
不良集団の強制募金活動を止めさせ、気の弱そうな相手を逃がして、のお決まりコースだったのですが、
「ちょっと、お止めなさいまし」
そのときは固法先輩と初春と、わたくしの3人で見回りをしていましたの。

「聞いているのですか、あなたがた」
不良達はカツアゲからナンパに切り替えたようで、固法先輩と初春を囲み始めました。

「おっぱいでかいね、姉ちゃん。俺のはさんでしごいて、絞りたて！生！飲んでくれねえかなあ」
「ミルク飲み過ぎだろう、この胸。何人のＯＯＯ汁飲んだんだ？」
「さわらないでっ！大人しくして離れなさい」
「僕ちん大人だからさあ、触っちゃうんだＺＥ」
「カワイイ娘のデリヘルなんて、ジャッジメントもいいサービスしてくれてんじゃねえか」
「や、やめてくださいよぉっ」
「スカートの中はパンツはいてまちゅかー？それともノーパンで誘ってやがるのかなー？」

固法先輩は、その身に実ったたわわな果実を触ろうとした男の手から逃れようと、体をよじってかわす。
おっ！揺れた！！ＮＩＣＥ！

あ、もうちょっとで初春ちゃんのおぱんちゅが！が！
めくられそうになっている初春のスカートの超絶対三角領域（ウイハル・トライアングル）が！ああっ！
でもわたくしにはお姉様がいるというのに。ごめんなさい、お姉様。
心は健全な男子なの。
脳内に保存！保存！
ん？ちょ、誰！ババア声なんて言ったヤツ出てこいや！ロリババア、合法ですＮＥ（違います）

そろそろ止めないと、なんてやっていると…
ガンッ
後頭部に激しい衝撃が。
一瞬意識飛びかけました。
「「白井さん！！」」
よろめいた力の入らない体で振り向くと、不良が不愉快なニヤニヤ笑いで立っていた。手には鉄パイプ。これで殴ってきたのか…
凶器も出さず暴力を震わなかったから、こちらも大人しく口頭だけで対応していたというのに、不覚ですわ。
「こいつテレポート持ちだからな、先にヤっとかないとな」
「そうだったな」
「他のは大した能力じゃねえから、ゆっくり楽しんじゃいますか」
やばい、能力がばれてる。こいつらの中に能力検査（スキャニング）がいるのか、それとも、悪目立ちしすぎたか。
それにしても、体に力がはいらない。ふらふらする。
女の子を目一杯殴りつけるなんて、許さない！
太ももものホルスターから鉄矢を抜き、反撃に何本か飛ばしたが全部バラバラにあらぬ方向に飛んで、落ちた。
頭がくらくらして、計算がぶれて、立っているのがやっとだ。
「あぶねえ、あぶねえ。も一回フルスイング、やっとくか」
「！」
そこから、記憶が　ない

「　　」
「　　」

ん、　　声？　　話し声、が聞こえる。

「あ、ありがとうございます」
「本当に助かりました」
「いえ、いいってことですよ。気にしないで」

目が開き始めて、目の前に男のひとが…
周りに何人も倒れた体格のいい男達もいる。

「白井、だったよな。大丈夫か？」
このつんつん頭で、お節介焼きな殿方は、もしかして上条さんですか！

「助かりました、ですわ」
「頭が腫れて、少しだが血もでてるぞ。すぐに医者に診てもらわないとな」
上条さんは、ちょっと怪我していたけど、初春さん、固法先輩は無事みたいだ。よかった。
「救急車は…あ、来ましたね」
「男達の拘束は終わったわ。すぐにジャッジメントの応援も現着するって」
「そっか、ならもう安心だな。じゃあな白井しっかり診てもらうんだぞ」

上条さんも固法先輩を見ると、目線は胸、顔、胸にいってる。またしても。
仲間だ…じゃなかった、こっちに話しかけておいて、器用ですね。

ちょっと不覚をとったのは、固法先輩の弾むモノに見とれたからじゃ、ないんだからね！

これもお姉様からの愛の鞭かしら。よそ見してごめんなさい。ああ、お姉様愛していますとも！

なんて、救急車で運ばれてる間考えてました。不謹慎かな。

さすがフラグ建築士。ちょっとときめいちゃったぜ。

とある8　カエル顔のお医者さん

頭の怪我なので、意識はあっても即検査入院。ここは例の病院では！
救急車で運ばれた先は、とあるでいつも出てくるあの病院。この世界は他に病院ないのかしらってぐらい、ここばかり利用してますよねー。
カエル顔のお医者さんに検査中、退屈なので考え事してました。
まあ、施設も立派、我々の住環境と近いから運搬も早い、そして、なにより、医者の腕がいい。
そういう理由だったのかあ、納得。

「ま、特に異常はないようだけれど、一応予後のことも考えて休んでいくといいよ」
そう言って、カエル顔の医師は病室から出て行く。入れ替わりに、ジャッジメントの2人が入ってきた。

「先生にお聞きしましたが、異常なかったんですね。よかったです」
「あら、白井さんの異常行動は異常扱いされないのね」
初春さん、心配してくれてやさしいなあ。固法先輩、そこ心配箇所ちがいます。異常なのはあなたの胸部ユニット！ですわっ！！

次の日、入院したわくしの病室に、お姉様と佐天さん、昨日に続いて初春さんがお見舞いに来てくれた。

「来たわよ、黒子。起きてる？」
「あらお姉様、みなさんまで。どうぞお入りになってくださいまし」
「こんにちはー！お邪魔しまーすって、元気じゃないですか。もっと包帯ぐるぐる巻きかと思いましたよ」
「包帯をあーれー、おたすけーって、取りたかったんですわね、佐天さんは」
「ばれましたか」ウフフ
「これ、差し入れのジュースよ。好きなの選んで」
お姉様からホット餅入り小豆ウーロンをいただく。そして、なぜだか乾杯。

「あ、パジャマ忘れちゃった、御坂さん、初春、取りに行かないと！」
「「ええっ！？」」
「ここなら遅くなっても泊まれますからね…って、違いますよっ」
「お姉様は、裸でもよろしいのに」
「なにいってんのよ！こらっ」
このときばかりは電撃は控えてくださる、優しいお姉様。これも愛ですわね！ラヴですわね！
場所が変わっても、ガールズトークは変わらない。ジュースもあるので長話モードの準備はカンペキ。

「頭に傷があったら、縫うためにそこだけ刈ってハゲになるそうですね」
「白井さん大変じゃないですか！」
「そ、そうなの？黒子。見せてみなさいっ」
「おねえさま、それは昔の話ですわ。それにわたくし、ハゲなどございません」
騙されてあせるお姉様、いとかわゆす。
「そんなに心配されるようでしたら、ご覧になります？黒子はどん

な所でもお姉様にお見せする準備は出来てましてよ！！」ガバッ
「こら、怪我人は大人しくしなさいって」ムギュ
押さえつけられました。むだ毛の処理も、勝負下着の着用も、普段から徹底しておりますのに。

不良にボールにされた頭の怪我は初日に治療済みと言われ、皆が帰った後おこなった予後検査に異常なかったので、退院許可おりました。
明日昼には帰れるそうです。この怪我で2泊で済むなんて、科学が進んだ世界はさすがだなー。それとも、あのお医者さんがすごいのか。
私が頑丈じゃないのは、しかたないかな。華奢な女の子の体だし。
黒子さん、傷物にしてゴメンナサイ。犬にでも噛まれたと思って許して！（何か違う）

カエル顔の医師とは何度もお世話になるだろうから（主に上条さんが、ね）仲良くしておこう。

とある9　謎の小包と謎の準備

平日の昼間なので、付き添いもなく1人で寮に帰ると、寮監さんが出迎えてくれました。
退院したときにお出迎えなんて、見た目と違ってやさしいですね。
「白井、お前に入院中に小包がきていたぞ。海外からの郵送か」
ああ、そういう理由でしたか。
「ありがとうございますわ、寮監さま」
「中身はなんだ？」
知らない、けど　…これは、危険なモノでは！？ドキドキ
箱のつぶれ具合と梱包のされかたで、配達に日数が結構かかっていた様子。
俺が憑依するまえに注文したものだろうから、中身なんて知らないけど、たぶんエロイ物！まちがいない、うん。

「海外の一部地域ではやっている健康器具ですわ」
ま、ジョークグッズかもしらん。

早速部屋で開けてみよう。
いまは、お姉様が帰宅されていないので、きっとつんつん頭の人とＴＯＭ　＆ａｍｐ；　ＪＥＲＲＹしてんだろうなー。なっかよくケンカしな、っと。
こっちはＬＯＶＥ　＆ａｍｐ；　ＰＥＡＣＥさー（意味不明）

がさごそ

って！！
なんてもの、注文していたのですか、黒子さん！これじゃ、ＬＯＶ

Ｅ　＆ａｍｐ；　ピーーー＜自主規制＞じゃないのさ！

お姉様に使わないといけないじゃないですか。

覚悟してくださいませね。フヒヒ

ここでは詳細は申せませんが、科学の進んだこの学園でも買うことの出来ない、とてもとても変態の文化の先達の地域のとある極物の逸品だとだけ、申しておきましょうか。

今日は怪我のため欠席になっているので授業は休んで、お姉様が帰ってくるまでに、病院でも考えていた今後の準備を進めることにする。

体を鍛えることも、準備も怠らない。でなきゃ、危なくって仕方がない。現に不良程度で入院しちゃったことですし。

まずは第一位に対しては、どうしよう。

ベクトル反射なんぞ、戦わなきゃいいじゃない。やっぱり、これだよね。

逃げるのって、得意です。性格的にも向いてるし、テレポート能力だってそう使えるし。

あと、自前スキルの精神攻撃もね。

ネットであやしい物通販したのを履歴とブクマで確認したときに見

つけた、ろーりろーり写真だよっと。きっと好きでしょ？彼。
それと、いかがわしい変態写真に一方さんをコラージュして用意しておきました。
拡大で何枚もプリントアウッ！ですわ。
これで、動揺すれば逃げる時間は稼げるかな。

自前の体じゃないから、できるだけ傷つけたくないんだよね。黒子さん、カワイイ女の子だし。
胸無いけどさ。
くっ。自分で言ってダメージ受けた。

「お姉様にも、このお写真お渡ししておこうかしら」

ついでに、黒子流素肌触合（ハード・スキンシップ）で、お姉様の胸をもみにいきましょうかしら。
ふへへ。

そうそう、あの写真お姉様にお渡ししたら、瞬殺で電撃粉砕されました。
「悪趣味」だって。
わたくしだって趣味ではありませんわーーー！！
声を大にして言いたい。ですのっ！

とある１０　妹達（シスターズ）（前書き）

残酷描写があります、ご注意下さい。

とある１０　妹達（シスターズ）

深夜のトレーニングをしていると、その日遠くから微かに銃声が聞こえた。
なんだろう。

テレポートで音から少し離れた位置に出る。
あのゴルフバッグ大の袋を抱えた常盤台の服の少女たちは…
人数にして３、４人の常盤台の制服のゴーグル少女。
そして、２つの大袋。
周りには黒い水たまり

…いや、あれは紅い血だまり。

実験、していたんだ。

そうだよね、まだ物語は始まったばかりだと思っていたけど、すでに進行していたんだよね。
この、くそったれな計画が。

見つからないように細心の注意をはらいつつ、テレポートでこっそり後をつける。
民間車に偽装した装甲トラックがミサカたちを載せて、出発する。
着いたのは研究施設郡の廃棄倉庫の１つ。
しばらくしてそこからトラックが出ていった。ナンバープレートと

窓の中を遠目で確認し、同じ車両だとわかった。研究所に帰るのだろうか。
なら、この立ち寄ったこの廃棄倉庫には何があるのだろう。

気になって中にこっそりとテレポートする。慎重に、慎重に。
ばれたら速攻で逃げようと思いつつ、進む。
人のいない所から見ていく。

そのときだ。

気になったのは、車庫を除いて、施設の大半を占める体育館ほどの倉庫。
窓もなく、光は倉庫隅の赤い非常灯のみ。
誰もいなさそう。
こっそり入ってみる。

何のにおい…　生臭い、肉の香り。

よく見ると、さきほどのゴルフバック大の袋がいくつも乱雑に放置し、積み上げられていた。

ま　まさか

近くにあった袋を少しだけ開けて…

「！！！！」

声があふれ出そうになった！

髪が、腐肉片がついて変形した頭部と思われる一部が見えた。
どす黒く染まった髪の一部が、元の明るめの茶髪を見せる。

これは

お姉様の体細胞クローンの…

吐き気がする。
山と積まれた死体袋（ボディバッグ）をこのまま放置しておけない。でも全員を埋葬して弔うこともできない。
頭がぐるぐるまわる。
なんていうものを、見てしまったのだ。

死体集積所。

クローンといっても、体組織はメカではない。人と同じ細胞体。まして お姉様と同じ肉体なのだ。
それなのに、一定量が集まり次第、燃やすのだろう。解体された調理済みの牛や羊と同じ扱いで。
反吐が出る。
科学サイドの狂気が、そこにはあった。

どれだけ呆然としていたのだろう。

袋のある一角から、物が動いた音がした。

ネズミ、だろうか。もしかして蛆かもしれない。

でも、もしかしたら…

音のした方に私は動いた。

とある１１　欠番々号（ロストナンバー）（前書き）

残酷描写があります、ご注意下さい。

とある11　欠番々号（ロストナンバー）

袋の中は比較的新しく腐敗も進んでいない、腕のちぎれたお姉様の肉があった。
胸の辺りが、動いた？…まさか。
じっと見ていると、さっきまで閉じていた目がいつの間にか半開きになっていた。

「！！！！」

漏らすかと思った。ホラー映画なんて目じゃない。
お姉様の寝姿を見慣れてなければ確実に失禁していた。

「生きている、の？」
乾いた口で、クローンにつぶやいた。

「…」

喉がつぶれていて、しゃべれないのか。
話さないけれど、内出血して白目が真っ赤にそまった瞳がこちらに少し動いた。

助けなくては！
そのとき私は咄嗟に袋に触れ、テレポートした。
行き先は第七学区の病院。
この体が入院したことのある、あの場所。

一人分の袋とともに、カエル医師に会った。

半狂乱になりながら、私は医師に庇護を求め袋を預けた。

緊急手術

数時間後、オペ室から出てきたカエル医師に話を聞いた。

お姉様のクローンは2人。
おかしい、袋は1人分…

カエル医師が、落ち着いた声で説明した。

体が半分ずつ折り重なるようにして入っていたんだそうだ。

それを聞いたとき、私は吐いた。

「おちついたかい？」
「は、はいですの」
「こういうことは、まれではあるが、たまにあるんだ」
「…」
「一応、2人とも命は助かったけれど、脳の機能は相当落ちているね。体の方も再生治療させるにしろ、状態が状態だけに、しばらく入院が必要だ」
「助けて下さったことには、たいへん感謝いたします…ですが」

「元通りには治らないよ。残念だけどね」
「そう、ですか」
「君は助けたことに後悔しているようだけれど、最善を尽くしたと思うよ」
「ですが」
「あとは、あの子たちの問題だよ。君はそこまで関係していない」
冷たい言い方だけど、心にしみる。死体にまみれて壊れかけた私の心までも、カエル医師は治してくれているようだ。

「死亡というか、すでに廃棄処分済み、だそうだ。彼女たちから聞いたよ。だから、もう安心だ」
追われることも、捜される心配もない、ということなんですね。すでに、廃棄物扱いだから…。

病室の場所を教えてもらい、すでに朝日が昇りかけて空が色づき始めた頃寮に帰らされた。

お見舞い、行かないとね。

寝不足のまま、学校へ。
もうどうにでもなーれ。

保健室に直行して睡眠をとった。
目を閉じると、お姉様の死体がうかんでくる。

なんとか昼までには少し寝れていたようで、少し体が回復した。
昼食の時間、食欲なんて当然わかない。でも、黒子さんの体に迷惑はかけられない。
こっそりテレポートして部屋にもどり、買い置きしていた間食用のブロックタイプのビスケットを、むりやり呑み込んだ。

とある12　美琴

side　美琴

黒子のヤツ、また朝帰り。

数日前から夜中に出かけているのに気付いては、いた。
気になるじゃない。
テレポートで移動されると追うわけにもいかないので、行きと帰りの黒子を狸寝入りをしてこっそり見ていた。
おかげで授業中の眠いことったら！

普段なら2、3時間もすれば帰ってくるところが、今日は朝日が昇ってからしばらくして、寮の中が動き始めた6時まで戻ってこなかった。

疲れているのは毎回のことだけど、いつもの汗の匂いだけでなく、今日は鉄の…いえこれは血の匂い。
帰ってきてすぐにシャワーを浴びていたようだけれど、疲れなんてとれてないじゃない、ひどい顔。

「元気ないわねー、何かあったの？」
「いえ、なんでもありませんわ」

黒子が答えやすいように、軽く普段どうりを装って聞いてみる。
なんかあるでしょう！隠すのが下手すぎだわ。
私にも言わないつもりなのかな。同じジャッジメントの初春さんは

知らないみたいだし。
個人的な理由？

「黒子を心配してくださるのですのね、感激ですわー！」
考え事して隙を作った私に、むりやりセクハラして誤魔化すなっていうの。
役に立たないのって、さびしいじゃない。

結局、あの子は保健室に一日中お世話になって、あげく部屋で就寝中ですって！？
眠れなさそうにしていた黒子が睡眠導入剤までのんでなんとか寝ついたのだから、起こしてまで聞けやしない。

寝ている今のうちに、初春さんと佐天さんに聞いてみよう。
2人と会うためファミレスに向かう前に、丁度髪の毛をつんつんにしたあいつが通りがかった。

「ねえ、ちょっと聞きたいことがあるの」
「なんだ、藪から棒に。けんかは買いませんよ。上条さんは貧乏なので特価品しか買わないのです。ビリビリのは高いのでお断り」

ビリビリって！
「あー、ジュースおごるから付き合いなさいよ。今日は話だけだから」
「そういうことなら、わかったよ」

ちょっと遅れることを初春さんたち2人にメール送信して、公園の自販機横のベンチに2人して座る。

「黒子のことなんだけど、最近のことでなにか知らない？」
「ああ、あいつなら、この間ここの公園で夜中テレポートの訓練していたぞ。超早朝！のトレーニングとか言ってたな。頑張ってたぜ」
「夜中の特訓…か。ちゃんとやってたんだ」
「そんとき少し話したけど、あいつけっこう話しやすいやつだったな」
「え？何話したの、教えなさいよ」

「胸…じゃなかった、食生活とか、学園の話とか雑談がほとんどだったかな」
「それだけ？」
「ああ、後そういやあ、人を助けるとき飛び出して行くのって、怖くないのか？とか真顔で聞かれたかな。他にもいろいろあったが、あとフラグ建築士？だったか、意味わかんねえ」

「そう、ありがと。じゃあ、また何かわかったら、教えてちょうだい」
「ああ、いいぞ」

上条と分かれてから、初春たちと待ち合わせのファミレスに向かった。

能力のトレーニングだけにしては不自然すぎる。会って早々2人に聞いた。
「最近気になることって何かない？噂とか、ジャッジメントの情報とか」

「あまりそういうのは言えないんですけど、御坂さんには特別ですよ」
先に頼んでいたミラクル・ケミカル・ブレンド・パフェを一口頬張

りながら初春は答える。
「そういえば、最近夜中に銃撃音が聞こえるそうで、スキルアウトの一部が活動してるのかな、と言われてますね。死体は上がってませんが、銃弾と血痕跡のルミノール反応がでる地域もあるそうです」
それを聞いた涙子は、ヤシの実にがうり味の季節限定ソーダを飲み、話を続ける。
「私は、ネットで御坂さんに似てる人を見かけたって見ましたけど。芸能人みたいに御坂さんのコスするの流行ってるのかな」
女3人寄ればかしましい。
「常盤台の制服カワイイですからねー」
「そういえば、まだ初春のパンツ穿いてるか確認してなかったやー、失敗失敗」
「むー、だめですよー！こんなとこで」
「じゃあ、違うところならいいの？　んー、トイレとかでする？」
「佐天さんーっ！」
だんだんと話は脱線していく。

血、かあ。

なら、犯罪の場所の捜査はすぐには情報が集まらなさそうだから、病院をハッキングしてみるか…。
日時がわかるのだから、学区内の病院の出入り口の防犯カメラあたりを調べればわかりそうね。

いつもの漫才に相槌をうちながら、思考を進ませた。
しばらく話をして注文の品が片づき、ドリンクの氷も溶けきったところで、2人と分かれ調査をはじめた。

ビンゴ！

「ここって、この前行った病院じゃない」

手術室前のカメラになんで、黒子が写ってるのよ。
出入り口のカメラでは確認できなかったのだから、テレポートで移動したってことよね。
急がなければならない理由があったってことかしら。
黒子が怪我をしたってわけじゃないの？
でも、あの服に付いた血は…。

手術室から出てきた患者の映像を見て、美琴は止まった。

なんで…。

そこには包帯まみれの自分とうり二つの女性が、ストレッチャーで立て続けに運ばれている所だった。
２人とも、各々足や腕のいくつかあるべきところが、膨らんでいないシーツを掛けられて。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

とある13　対立

「黒子、これはどういうこと？」
黒子が写った病院内の写真を目の前に置かれ、美琴に尋ねられた。

一瞬、動揺した。
まさか！
意志の力で、なんとか反応を隠す。
最近はこんなことばかりだ。反省しつつ、落ち着いてきた頭で考える。

「黒子、病院で何をしていたの？」
「なんですの、これ。先日入院した時のお写真、でしょうか」
「日付・時間を見て。退院した後でしょう、まして深夜に。ねえ、何があったの」

そう、お姉様は気付いてしまったのですか。
でも真実なんて、申せるわけないでしょう！

「なにが、と申されましても」
しらを切る。
「黒子っ！」
「お姉様が何を聞きたいか、申し訳ありませんがわたくしには心当たりございませんわ」
ばれていようと、しらを切り続ける。

「私には言えないことなの？」
「存じ上げていないことは、言いたくても言えないじゃありませんの」

「黒子…」
「それに、プリントデータといっても、先日の一方通行用に作った合成写真のこともありますし、どなたかが偽造したのでは？」
「これも、そうなの？」
美琴似の四肢の不足した2人の怪我人の写真を見せる。
「悪趣味なお写真ですわね。これどうされたのです、お姉様」
「…」

お互いの拳が、震えていた。

きゃっきゃ、うふふの女の子カーニバルな世界だと思っていたら、とあるの世界は闇が深すぎる…。

暗部や科学者の非道徳で非常識な行動で、どんどん闇が広がっていく。

真実を知った美琴は一方通行のときと同じように、きっと真正面からぶつかって…そして壊れてしまうだろう。
2人を助け出した場所の死体置き場なんて、教えるわけにも、まして見せるわけにもいかないじゃない！
あの子達だって、まだ治るのに時間がかかる。
完治なんてしなくても、せめて1人で生きられるようになんとかしてあげたい。
その子の傷口をみせて、あの子達もお姉様も傷つける事は、わたくしにはできない。

これからの黒子と美琴の関係を崩すわけにも行かない。

だから、ちょっとだけ、お姉様と距離をとってしまった。

弱いんだな、自分。

とある14　ミカとミサ

その間、入院中の妹達（シスターズ）に何度も会いに行った。
少しずつ手術が進み、四肢の外観が戻っていくのに奇跡のような思いがした。

片言ながら話もできる様子。そういえば手術後カエル医師から、この子達の話を聞いたんだっけ。
そのときから会話できたんだ。脳は大事なさそうでよかった…。

「ＭＮＷ（ミサカネットワーク）へ、の接続拒否され、ました。認証、不通。接続にエラー、が、多発。出力不安定の、ノイズ、のため、と判断します。とミサ、は、淡々と、話します」
「ＭＮＷ（ミサカネットワーク）への、接続拒否されま、した。脳波リンク、機能低下による、プログラム、エラーの、模様。脳波、安定できま、せん。とミ、カは、淡々と話し、ます」

甘い考えだった。
病室で包帯まみれで点滴をうけ、いくつもの検査機器がとりつけられ横たわる2人を見て、甘い幻想はかき消えた。
脳の機能障害など、無いはずがなかった。袋の中で消える寸前の命だったのだ。
数時間遅いだけで、この子達も他の死体袋と同じ運命を辿ることになっていた。

ＭＮＷから弾かれて、もう仲間との連絡はできないのか…。
能力的にはこの2人はすでに妹達（シスターズ）ではない、そう断言された気分になる。

ミサカネットワークに繋げないけど、今のこの子達では生きているのが発見されても、きっと身を守りきれない。
だから、嫌な考え方なのかもしれないけれど、ＭＮＷに関してはこのままで良いのかもしれない。

「ミサ、は不完全な、状態、での復活と、いう、わけ、ですね」

気分は落ち込んでいく。その間も２人はぼそぼそと言葉を紡いでいる。まるで、話せるように訓練しているかのように…
それを聞いてるうちに気付いたけれど、＜ミサカ＞とは言えないんだね。同じところでつっかえている。

「ならば、このまま、不完全な脳を、除外して、使えるところ、は、お姉様の、体組織の、予備パーツ、などに、保管すれば、よいのでは、とミ、カは考え、ます」

な…何言ってるのこの子達は！そんな悲しい考えはだめに決まっているでしょう。
「い、一度死にかけたのに、また死のうとするつもりですの！？何故生きようとしないの！！」
つい、反論してしまった。

「わたしたちは、もう、死んでいるの、です」
「なぜ、泣いている、のですか？」

俺だって、憑依なんてしてる異常な存在だから、本当は死んでるのかもしれないんだよ…
考えたくはなかったけど。そう思うと、涙があふれてくる。

命が残っているウチは、絶対あきらめさせたくない！

この世界のヒーローでもヒロインでもないけど、そんな悲しい幻想はぶち殺してみせるっ！

あなたたちのことも、絶対放ってはおかないですわ。

「そうだ、あなた達に名前をつけましょう」

戸籍をあげられる手段なんてないけれど、あなたたちの生きている証になれば。せめて名前ぐらいは、いいですわよね、先生。

貴方の名前は、　ミカ

貴方の名前は、　ミサ

さっきから聞いていた、各々の呼び名、そのままだけど…

「ミ、カは、ミカなので、すね」

「ミサ、はミサなの、です、ね」

表情には表れなかったけど、嬉しそうな感じが伝わった。

次に会いに行ったときは2人とも、上半身を起こしていた。

まだベットからは移動できなかったけれど、身につけた検査機器が減っていたので、少し安心する。

ミカは片手の指が包帯から出され、動かせるようになっていた。わきわきと動くのを確かめるように無心で動かす。

ミサはそれを不思議そうに見ている。両手はまだ揃ってはいないけれど、包帯まみれの左手が無意識に動いてるのを見つけた。

「今日は、これをお持ちいたしましたわ」

そう言って、金髪ロングのウイッグを渡す。

「「なん、ですか、これ、は」」

息ピッタリだね。ずいぶん良くなったみたい。

「妹達（シスターズ）から抜け出せたのですから、これで変装して新しい人生を送りますわよ」

「抜け出せた、というより、廃棄され、たが、正解とミ、カは、判断し、ます」

「ＭＮＷに、接続、できる能力も、ない、ので、見捨てられている、と、ミサ、は判断、します。」

「ミ、カたち、は、所詮１８万の単価、で大量に、作ら、れる量産品です、ので、不要なら廃棄、するのは当然、です」

その言葉にカチンと来た。

「単価１８万円だから、使い捨てて良いですって！？ふざけないでほしいですの。わたくしの単価などタダで出来ましたのよ！ならば、ミカもミサも高級品だと誇りなさい！」

「それは、考え、つきません、でした」

「くろ姉は、不思議なひと、です」

くろ姉？私のことかしら？？

「名前をつけて、もらったお礼に、くろ姉、にも、くろ姉と名前を、つけさせて、もらいましたと、ミ、カは褒めて、もらえるよう、頑張り、ました」

「くろ姉が、駄目なら、くろちゃん、など、いかがでしょう、かと、ミサ、は一生懸命考えた、次の、候補を発表、します」

「くろ姉、でいいですわ」

くろちゃん、では私が妹みたいじゃりませんの。でも、嬉しいですわ。

そこで病室に巡回に来たカエル医師が話した。
「そろそろ、寝たきりから回復できそうだね。この病院では、看護婦が不足しているんだ。どうかな？２人はリハビリが終わり次第、住み込みでここで働くというのは」

こっちのことをよく分かってる先生だこと…。
「あ、ありがたくお受けします、ですわ。いいですわね、ミカ、ミサ」

「非常用電源、でしたら、おまかせ、ください」
「ミ、カたちの発電能力、は、低下いたしましたが、それくらいでしたら、つかえます、とミ、カは必死でアピール、します」

まったく、不器用なんだから。
「電気なんてたりてますの、あなたたちの笑顔と行動が求められてるんですのよ！」
最近は教育係になってる予感はすれど、一番不器用な自分が言う事じゃないですわね。恥ずかしい。

「おや、くろ姉の、顔、赤くなって、ますね」
「これがもえ、なの、ですねとミ、カは学習、します」

「ははは、いい姉妹じゃないか、君によく似ている」

うがー！！２人に笑われた！先生までっ！
でも、姉妹、か。なんだか嬉しいな。次の差し入れは携帯かな？３人でくろ姉ネットワークでもいたしましょう。

私が来て、助かった命がある。同じイレギュラー同士として、よろしくお願いいたしますわ！

とある15　日常

お姉様のご様子からして、どうもミカ、ミサ以外の妹達（シスターズ）の件もあった模様。
距離をとっていたので、こっちは何にも関与できなかった。何番からが助かったなんて、できれば知りたくもない。その前の番号は2人を除いて死んでいるのだから。
お互い、しばらくどっぷり落ち込んでました。

『くろ姉、おはよう、ございます、と、朝から、寝ずにモーニング、メールをミ、カはいそいそ、と送ります』
気晴らしは、たまに来るミカとミサの同時着信メールかな。
『おはよう、から、おやすみまで、ミサ、もご一緒いたします、と参加を、表明して、みたり』

リハビリと手術の厳しい内容でも、文章をパズルのように前後に分けたり動画で輪唱したりと、面白がっているのが伝わってくる。

『おはようございます、ミカ、ミサ。今日は良いお天気になりそうですので、窓を開けて風に触れることをお奨めいたしますわ』
『了解、であります、と、ミ、カはミサ、に窓を開けることを、横にいる、のに、メールで要求、します』
『包帯まみれで、ミサ、は窓の鍵が、開けられない、ことを知っている、意地悪な、ミ、カ覚えていろ、とミサ、は、くろ姉にヘルプを、求めます』
『くろ姉、ちょちょいと来て、開けて、くださいませんか、と、見えないのにミカ、は上目遣い、をしてみます』
『もう、わかりましたわ、すぐ参じますわよ！』

こんなたわい無い会話でも、続けていると心が回復してくるのかな。

あれからしばらくお姉様との間は少々ギクシャクしてましたが、先に回復した献身的なわたくしの肉体表現（セクハラ）で、ちょっとずつ笑いもでるようになりました。

お姉様への愛は誰にも負けませんわ！と黒子さんが戻ってきても恥ずかしくないように、過剰な愛欲表現を続けることにします。
具体的には、愛情たーっぷりに触れる、さわる、もみ上げる、もみしだくでしょうか。

シャワーから出てきた洗い立てのお姉様を、居室に戻った瞬間背後より襲う。
「隙だらけでしてよ、お姉様」
後ろからがっぷり柔らかい部分を揉みし抱く。そして、コンディショナーの香りがただよう髪をかき分け耳を、甘がみ。
「ち、ちちち、ちょっと！な、なにするのよっ！！」
久しぶりのためか、お姉様も普段より動揺から回復するのが遅いです。その間、揉み・甘がみ、堪能いたしました。
「いつまで揉んでんのよ、ゴラーーー！」
やりすぎた分、多めの電撃を戴きましたが。

まあ、お姉様へのボディタッチはし放題でしたものね。しないと逆に怪しまれちゃう。
これはスキンシップ！ですわ！なーんて言い訳しなくってもいいの。
さすがは黒子さん！そこに痺れる、憧れる！
お仕置きの電撃で当然痺れを戴きますが、お姉様は憧れてはくれま

せん。うむむ。

あの全体のふんわりタッチのやんわらかさと、触るとすぐに適度な固さで自己主張なさる先端部との柔度のコントラストは、正直クセになります。たまりません。

今日も今日とて、πタッチイベント実施中（自分の中で）です。

大きさで言えば知り合いトップの固法先輩のお胸は、先約がいるから観賞用ですからねー。泣いてなんてないですのよ。

鑑賞だけでなく、愛でてこその花。揉んでこその胸。

脂肪ではなく、愛情でこそ大きさを計るべきですの。

なので、お姉様にはべったりですのことよ。ヲホホ。

ほーらお姉様、固法先輩に追いつき追い越せですわ！

何度もハードなスキンシップを繰り返して電撃ローストになった成果として、最近は微妙に反応できて、避けられるようになったかも。

めざせ４秒πターッチ！

おかげで、テレポートの発現時間が早くなったので、いい自主練でした。おっす。

あ、そうそう先日はWタッチイベント開催中でしたが、お姉様すごく拒否されました。

きっとイライラでしばらく甘い物食べ過ぎてましたわね。お姉様が熟睡したら詳細に測定して記録しておかねば。ねば。

とある16　予防

そして、普段どうりにジャッジメントとして活動。
最近はスキルアウトどもの抗争があり、手荒なことが増えた模様。
現場に到着すると、やられまくったスキルアウトが大量に倒されていたりしますが、聞き込みをすると相手はどうやら白い派手な服を着た優男1人だそう。
それって…

白い優男のせいなのか判らないけれど、治安悪化、犯罪増加はいい傾向じゃない。

ジャッジメントとして対処するのに犯人相手とはいえ、殺すのはいけないので考える。
いままでは鉄矢で拘束していたけれど、多数相手では使っている余裕も数もたりない。どうしたらいいだろう。

餅は餅屋。クスリはお医者さま。
お世話になっているカエル医者に話をして、筋弛緩剤をサンプルとして少量もらい、それを使ってみることにした。
効き目は弱くしてあるとのことだけど、強いと息まで止まってあぼんだから仕方ないか。

使ってみると、特に室内でたむろしている犯人確保に重宝しました。
でも、これはチンピラ程度のレベルの低い人にしか効果ないんだよね。
緩やかに体の力が抜けていって、数時間で回復してしまう。
一発即死のレベルたちには、対応できない。
レベル5じゃなくっても、たとえ2くらいでも動けなくなるまでに

何回か能力使われると、こちらがピンチだ。
どうしよう。
カエル医師には、これ以上の物は素人には扱えないと言われ、困ってしまった。

そう考えていると、ミサとミカが奥からやってきて、不思議な粉の入った小瓶を渡された。

看護婦見習いの空いた時間で研究していたんだって。
小瓶に詰まってるこの粉、なんだろう。きなこみたいで美味しそう。
くんくん。
こういうのって、ついやっちゃうよね！

「「あ、くろ姉かいじゃ、だめ」」
ふらふら

目が回るー

これ、即効性の睡眠薬でした。実体験しただけにわかるけど、これよくきくわー。

「くろ姉、は、もうちょっと、自重、すべきだと、ミ、カは、思い、ます」
「くろ姉、無茶はいけません、と、ミサ、は自分のことを棚に上げて、そう言い、ます」

使い所さえ気をつければすごく使えるモノを貰ってしまった。
ありがたやー。二人ともなんて気がつく子なんでしょ。わたしゃ嬉しいよっ。

いいこいいこ。

「えへ、へー」
「む、ふうー」

目を細めてうれしがるお姉様似のミカとミサ。なごむわー。
お姉様の子供の頃って、こんな感じだったのかな？

お姉様と同じスタイルをしていても、欲情したりしないのは不思議ですわね。おさわりし放題なのに。
電撃されないからかしら。

あら、新しい世界が開きそうですわ…

とある17　テレポートアウト

ここは？

いつものように深夜の自主練のために公園にテレポートしていたわたくしは、着くはずの場所とは違う所に出たので、途惑った。

窓もドアも見えない、ここはビルの中だろうか。

巨大な円筒器が見える。

上下逆さまで赤い液体に浸かっている緑の手術衣を着た人間。ホルマリン浸けなのだろうか？

死体？

げ、動いた。

いやな予感がして、即座にテレポートの準備。

な、１１次元の計算が阻害され…

アレイスター！

学園都市総括理事長にして、学園都市の最大権力者、そして暗部の主。

頭にその最悪の名前がよぎる。

こいつに呼ばれたらしい。

ちっ。

「ようこそ、異界の旅人よ」

頭にひびくいやな声。
耳から聞こえる音質は、人間的な落ち着く声のはずなのだけど、人を不快にさせる。

どうしよう、どうしよう。憑依してること、未来を少し知っていること、元妹達（シスターズ）を隠してること、不味いことといっぱいあるのに。
ばれてる！
このまま暗部に行かされては、私だけでなく、ミカやミサまで危険が及ぶ。人質として、使い捨ての駒として。

何をされたのかも解らないけど、テレポートに割り込みなんて、どうなってるの！？場所も不明の学園都市総括理事長の前にジャンプって！
そんな能力、魔法？があっては、逃げることもできない。頭の中で思い描く指定した逃亡先の座標が安定しないなんて、初めて。…怖い。

逃亡もできないのなら、なぶり殺しか…。生きている間にせめて交渉、するしかないか。
できるかどうか、じゃなくって、するしか手が残ってない。

しばらくの間、お互いは無言だった。
かたや、冷ややかな目で、目前の人物の観察をして。
かたや、混乱の局地から立ち直ろうとして。

待っていても、私を呼び出した理由を聞かせては…くれないか。
「突然お呼び出しになって、何用、ですの？」ゴクリ
足が震える。体の力が抜けていく。怖い。

「君に頼みたいことがあったのだよ、協力してくれるかな」
「った、頼み、ですの？　非力なわたくしではお役にたてそうもございませんわ、多分ですけどね」
全面協力なんて約束何されるか分かったものじゃない。でも、非協力すぎると、この場でアウトだ。私など、その程度の駒なのだろう。

「君のことは君以上に把握している。問題はない」
思考を、読んでるのか…治まりつつあった動揺が大きくなる。
「…何をさせるつもりですの？」
「わからないかね？」
「な、なんのことやら、さっぱりですわ。黒子だけに、目立たず慎ましやかなのが性に合ってますのよ。わたくしは」

なーんて、どや顔で見つめていてもツッコミもなくスルーされるのは痛くなんて、ないやい。
これでごまかされ、はしないか。

情報を流してくれれば相手の事を読める思考のヒントになると言うのに、威圧だけで事を進めるなんて、異能も甚だしいですわ。
どうやったら逃がして貰えるのか、考えなきゃ。
どこまで、協力するためのカードを切るのか…

「わたくしにやれ、と言うのは上条当麻のレベル６シフトに関係するお姉…いえ、御坂美琴へのサポート及び、戦闘行動への協力、介

入、及び計画の絶対守秘、ってとこかしら」

言い換えると、お姉様の平穏への協力（いつものこと）と、あのつんつん頭の熱血へタレさんへの間接的協力（食料不足の解消）。ケンカのために、すれ違いはそのままで、って事で良いですよね。
こちら側の勝手な解釈をしているけれど、これが現状を変えずにできる問題のないカード。

他のカードは…
黒子がやれることを考えると、まずはテレポート能力を使った暗部での活動。
偵察、暗殺、破壊工作など、使い道がいくつでも想像できる。便利すぎるのだ。

あとは俺の当面の未来を知っているという知識。
…物語として知っているだけで、ここに自分がイレギュラーとして入ってきている以上、未来の変化がある。すでに役に立たないだろうに。

そして、憑依現象の解析とその能力の利用。
これはモルモットにされるのと同義。だいたい、どうやって憑依したのかなんて知らないのだ。解析中に脳を弄られ廃人にされることは容易に想像できる。

上条当麻と御坂美琴に手を出してこない。呼ばれたのは白井黒子だという現実を鑑みるに、利用価値を考えつくのはこの辺りだと思う。
いま想像した手札のカードは後が悪すぎる。切ることなど出来はしない。

「しょせんはレベル４。高望みをされても、ご期待に応えるにはこのあたりが限界ですわ。」

ただ、ここで非協力的になっても魔術で強制されるかもしれない。お姉様、初春、佐天さん、ミカ、ミサ…親しい人とこの命を盾に武力で脅されたら、協力せざるを得ない。
でも、関係者の命と引き替えの暗部落ちなんて、戻った黒子さんに顔向けできない…

妥協はできない。
なので、協力はすれども能力不足。興味の低い、重要視も軽視もされない程度に人物にみられるよう、慎重に発言をする。

「協力的な態度を評価しよう」

これで、交渉成立！？いえ、まだ気を抜いては駄目。
テレポートは、…できる。阻害はもうされないということは、交渉は終わったのかしら。テレポート阻止されないって事は、そうだよね？
さらに無理難題をいわれる前に、退散せねば。まして、他者に会ったなら厄介なことになる。逃げなきゃ！

「感謝いたしますわ。では、ごきげんよう」

相手の気分が変わらないうちに、早急にテレポートした。

それほど時間は経っていなかったけれど、深夜の公園に着いたときには体中の力が抜けて立てなかった。
今夜は自主練中止。
ぐったりとした体でジュースを買い、ベンチに座って休む。
焦り、悩み、ぐるぐると脳内だけが動いて先程の会話と意味など考えていく。

協力する、と言った内容。
上条さんもレベル5のお姉様と何度も戦ってるから、何気にアクセラレーターのプラン踏襲してるのよね。
あと何回で上条さんレベル6になるのかな？知りたいような、知りたくないような。
だって、知るとろくなコトに成らなさそうですもの。
もっと命を使い果たすまで協力させられるか、それとも口封じさせられるか。
このまま小康状態の関係を続けていく間に、魔術サイドとの抗争でうやむやにならないかしら。

自然に先のことを気にし始めたことに気付いて、愕然となった。
だって、元の体に、元の世界に戻らないって考えてるってことだよね！

このまま黒子さんもお姉様がたも放っておけないし。ましてあの男にもう一度会って、憑依のこと尋ねるなんて絶対無理！
どうしよう。背中が汗でびっしょりだ。

とある１８　初心にかえって

自分の周辺には注意していたのに、アレイスターには、何時ばれたんだろう。
能力的なものか、魔術的なことか…。
謎が多すぎる。でも今はそんなことより、これ以上ボロをださない練習をしとかないと！

まだ指令がないので、初心に返って訓練しないとね。
ほら、語尾忘れてｒ

ですのっ！！！
「ですの」
「ですの」
「ですわ」
「ですの」
「ののわ」
「ですわ」

延々と繰り返してみる。

近くにいたお姉様と初春さんと佐天さんの３人からイタイ子を見る視線がキツイ。ですの…。
ここは、とあるファミレスＪｏｓｅｐｈ’ｓ。

ああ、パフェを持ってきた店員さんまで、その視線。
なんだかゾクゾクしますの。特殊すぎます、この体。

「黒子…いつも変だと思っていたけど、今日は特に変ね」
「白井さん、どうなさったんです？何か変なモノでも食べました？」
「悩みがあるんでしたら、聞きますよ！」
「あのその、なんだかこの扱いでゾクゾクいたしますの…どうしてでしょう」
動揺して正直に言ってしまった。

「「「え？？」」」

うん、会話止まっちゃった。

「いつもの黒子だったわ」
「そうですね」
「安心しました」

なんですと！？

適当に3人にあわせて会話しつつも、初春さんのパンツをテレポートで飛ばしたら、佐天さんにめくられた時どうなるのかな、って思う。
うん、ここまでしたら黒子さんに追いつけるかな。潮吹指芸（フィンガーテクニック）も鍛えなきゃね。変態道とは、1日にしてならず。
これが足りなかったのか、なんて現実逃避はそろそろやめて、今できることを考えよう。
アレイスターと会ったのは、事実なのだから。

これ以上隙を作らないために心の中も、黒子さんでいってみよう。

まず初春さん、じゃなかった初春からパソコン習おうかしら。
『今晩からできる、簡単な情報操作』やら、『データがたりないと

きの、すぐ出せるとっておきのテクニック』なんて、3分間ハッキングっぽいテクニック持ってそうですし。

裏へのアクセスや、情報制御等できるのならば、わたくしのことをどこまで把握し計画に使うつもりなのか、知っておきたいことは山ほどありますからね。

でも、何に使うか追及されそうですわねえ。困りましたわ。

あ、あの子達がいるじゃん！

いけないいけない、言葉遣い戻っちゃった。えっと、

ミサ、ミカ、よろしくですわ！

丸投げしました。

ついでですから、消音装置になりそうなものも作ってもらいましょう。きっと役に立つでしょうし。対キャパシティダウンの時など。

ファミレスを出ましたら、早速ノートパソコン2台買って届けにいきましょう。

とある19　プリント写真

パソコンを買って届けた後、使い方を少々レクチャーしている間にポシェットに入れっぱなしだったものを思い出す。
忘れてましたわ、あれせっかく作ったのですから使ってみましょう…。
しばらく後、その機会はすぐに訪れた。

「上条さん、はーい、これどうぞですの」

「な、ぬあっ、は、はだっ！！はだっ　かっ！」
前作ったエロ写真をプリントした目くらましを、殿方のまわりにテレポートさせ、目くらましに試してみましたの。
数秒どころか、ずっと挙動不審で隙だらけですわ。どういたしましょう…効き過ぎですのよ。

「白井、こ、ここ、これは、いったいなんだっていうんでございますのことよ」
足で1枚こっそり踏んで隠してるトコがいじらしいですわ。
他の落ちている写真、がん見ですのね。鼻の下伸びてますわよ、おーい。

これでは目くらまし試験クリアのご褒美、同室になってから休まず密かに撮り溜めた、『お姉様スペシャルまる秘お宝写真』差し上げられないですわねー。残念でしてよ。
エロでも、セクシーでもない、珠玉の逸品。

パジャマ姿のお姉様の寝ぼけて目の覚めるまでのあどけないご尊顔

が流れるような全てがピンナップ級の連続写真。
パフェをお口に入れる隙、微妙にお開けになって首をちょいと傾けて誘っているような制服お姉様の無防備な姿態のバストアップ。
スカートをぎゅっと握り、思い人に優しく出来ずにツンデレを反省するしゅんとした女神のようなご表情。
町中で振り向きざま思い人の名を呼ぼうとする瞬間の赤面し、ところける笑顔の奇跡の接写、など。

大量に撮った中から選ばれたお姉様マイスター・黒子チョイスの逸品は素敵に、素晴らしい出来ですのに！！これをお見せしたら、お姉様に惚れ直すこと間違いないと太鼓判をおしましてよ。
誰にもお見せできないのがとても残念なような、このまま隠しておきたいような…。
乙女心（？）は複雑ですわ、ですの。

ちなみに萌エロ・着エロ・フルチョイス、セクシーセレクト（各パジャマ・下着）バージョン共に、その数倍はございますけれどね！
これは門外不出（ＭＹ　ＥＹＥＳ　ＯＮＬＹ）ですのよ。ぐふふ。

あのあと、用事を思い出したと言って速攻帰られた上条さんとわかれ、１枚少ない写真を回収して次の練習相手を捜しましたの。
心の栄養をお渡しした、ということで総括理事長との約束は果たしましたわよね、一応。

セブンスミスト前の通りで、一方通行（アクセラレータ）さんをお見かけしました。
が、なにやらお怒りのご様子。
怖いのでこちらに気付く前に、即行逃げましたわ。

プリント写真？使う前に瞬殺されそうですもの！怖っ。

スキルアウトどもが、セブンスミスト付近の倉庫や通路など数カ所で倒れていると携帯に入る。
初春からジャッジメント出動の連絡ですわ。
これが理由でしたのね。

現場に直行できるテレポーターは便利なぶん、出動回数多すぎますの。
今日はもう、試せませんわね。ああ、忙しいっ。

とある２０　超機動少女カナミン（マジカルパワードカナミン）

この急がしさを紛らわすため、あとお姉様の戦意高揚（言い訳）のため行動に出ますわ！いけいけ黒子！！
お姉様なら、触って触れて揉みし抱いてもいいですわよね、ですわよねっ！

上条さんと一緒にいた白地に金刺繍の修道服の少女と選びに選んだアイテム、装着。
いざ、お姉様、お覚悟！といやっ！！

「超機動少女カナミン参上、ですわ！少女の胸に潜む凶悪パット性人、お覚悟！」
全身着ぐるみでお姉様にアタック。うりゃ、もみもみもみ。普段より２０％増し増しの偽装などお見通しですわよっ。さあ、そんな野暮なモノはお外しになって、ならなければ強制的に排除し…
「ふんぎゃあああああーーーー」ビリビリビリ

黒子、黒こげ。

「し、正体も分からないうちから電撃とは、ひどすぎますの」ゴホゴホッ
「顔を隠したところで、この個性的な声と語尾は黒子以外いないでしょ…」

「そ、それは、わたしくしへの愛ゆえの理解でしたのね！黒子感動しましたわ、おっ姉様ー！！」
「なにすんのよ！」バリバリバリ
「うぎゃああーーーーー」

でも、４秒揉めましたのよ。うしし。
明日は５秒をめざしますの！
触っておりましたら、思いのほか反応速度が速くなった気になりますわ。
阿吽の呼吸、ひっひっふー、ひっひっふー。（あれ？違ったかしから）

「あーあ、黒子のせいで喉が乾いちゃったわ。ジュースでも買いに行かなきゃ」
前髪を手櫛で整えて、いそいそと部屋から出るお姉様。
わたくしが痺れている間に、あの殿方を探しにいつもの公園へ行かるご様子。ばればれですわよ。

上条さんは2人でスーパーのタイムサービスに行くと、先程そう伺いました。今頃公園付近かしら。タイミングがいいですわね。
お姉様の野生のカン、さすがですわ。

残されたわたくしは喉の渇きを感じましたが、ご一緒したい気持ちを抑えて、寮に戻ることに。
表面が微妙に炭化して視界が隠れたカナミンヘッドを脱ぎ、ベッドに体をあずけて、ちょっと休憩。
カナミンヘッド、もう使えないですわね、残念。次は超機動少女カナミン・インテグラルを用意しましょう。

お姉様の電撃の気配やタイミング、だんだんと解ってきたような気

がしますわ。これを続ければ、もっと避けれるようにできるでしょうか？

ご褒美（π）と罰（ビリビリ）のある自主練、開始ですわね。
決して、ご褒美（ビリビリ）と罰（無反応）ではございませんことよ。

ご褒美（無反応）まで進化したら、さ、さすがにマズイですわよね。
ですわよね、黒子さーん。

とある２１　進入不可な場所（前書き）

残酷描写があります、ご注意下さい。

とある２１　進入不可な場所

テレポートして移動していると、たまに普通では進入できない空間に飛び出ることがある。
例えば、今いるこの場所。

通報をうけて出動し、近道をしている間に通りがかった迷路のような細いトンネル。
移動のために使う通路、というよりいわば狩猟場、屠殺場…そんな言葉が似合う場所。

すぐに現場にいかなくてはならないのに、足が止まってしまう。
風紀委員（ジャッジメント）では、この世界は守れまい。
警備員（アンチスキル）だろうと、止められまい。

天井の空気孔まで塞がんばかりの、何人もの血を塗りたくり黒ずんだ痕跡が、そう伝えてくる。

こんな事件現場、聞いたこともありませんの…

「白井さん、戻ってください。通報はデマだったようです」
立ち止まって呆けていたわたくしに、初春から連絡が入る。

呆然としていただけで何の手がかりも捜さず、ただ連絡がくるまで立ちすくんでいた。

その間誰にも会わなかった。
静かな、黒い暗い空間。
初春の声で固まった心と頭が少し冷静になったところで、ジャッジメント第一七七支部に戻った。

あの場所で停止していた思考がようやく動き出したので、とりあえずデータバンクを調査してみる。
そこでティーカップを持った初春が寄ってきた。
「白井さん外回り、お疲れ様でした。飲み物用意しましたので、どうぞ」
「ありがたくいただきますわ、初春」
「ところで、何を調べてるんですか？」
「え、ええ。さきほどのイタズラ通報、少々気になるところがありましたので」
調べている内容は、その後の血まみれのトンネルだったことは誤魔化した。不用意に伝えるべきではない、と判断したのだ。
「それ、私の方も白井さんが帰ってくるまでにやっておきましたが、イタズラの常習者が犯人でした。未成年なので、毎回注意だけで済まされてるそうです」
「そう、ですの。困りましたわね」
「ですよねー」
お互い、困っていることに違いがあるのだけれど。

初春がおしゃべりから仕事に戻ったので、こっそり調査を続ける。
データバンクには死体も怪我人も、目撃情報さえ回っていない。警備員（チスキル）も手を出した形跡もない。
それどころか地図も偽装され、あのトンネルは全く載っていない。
モニタに表示されるのは、何年も前から中止している『Ｅ２８１区

画作業予定地』と表示された地図。周囲数キロはその予定地だけ。
それを見て、ため息をついた。

大規模な隠蔽工作。その力を持ってすれば、すでに証言出来る者は口封じ済みと見ていい。

これでは、信憑性のない裏サイトで廻る噂程度でしか伝わっていないでしょうね。
現場に戻って調べるのも、ばれたリスクを考えると二の足を踏む。
自分もあの壁の染みになるのはご免だ。

やはりこの闇はジャッジメントの手に余る。
ああやって、何人始末されたのだと思うと身震いする。

気分を切り替えるためにジャッジメントの勤務時間中、ミカとミサへメールをした。
返信に、メールだけでは不満だ、カナミンの着ぐるみが実際に見たいと要求された。
その2人に、少々痛んだかぶり物とコスチュームをジャッジメント帰りに持っていくと返信。

病院にいってみると、勤務している金髪ウイッグでマスクをつけた片言の2人組、ミカとミサにすぐ会えた。
さきほどの場所のことも話していたから、調べたことを話したかったようだ。
「病院側からの治療・記録へ、アプローチしてもミ、カでは、捜し、きれません、でした。認めたく、はない、若さ故の過ちと、知ったかぶり。これは、パソコンのせいだと、ミ、カは責任、転嫁」
「犯行を洗って、みて、各バンク、から、変死関係、を、辿っても、

関係者全部、不明か死体に、なって止まってしまう。ミサ、は、最近付いた両手を、お手上げ」
引き続き勤務時間外で調査を続けてくれるそうだけれど、ここまで隠蔽されているものは、多分調査しても解らないだろうと言われた。
なら、初春か、お姉様に頼めば…

私たち3人以上のハッキングスキルの持ち主はいる。

駄目、見つかったら巻き込んでしまう。
目を付けられてもミカとミサの2人だけなら、合わせてもテレポートの重量範囲なので、一度にテレポートして逃がすこともできる。
元々身元不明なので、一度隠れてしまえば、追うのは困難だろう。
でもお姉様や初春含め、周囲の表の世界で生活している人たちは日常の繋がりが広く、関係者全員はとてもカバーできない。
助力を願っても、憑依したこの『私』と『黒子の肉体』のことを説明して、素直に協力して貰えるどころか、納得さえしてもらえないのではないか？
騙していて、裏切っていたなんて思われたくは…ない。
お姉様のクローン、妹達（シスターズ）の生き残りなんて、お姉様の感情を考えると、話すこともままならない。アレイスターに尋ねるのなんて論外。

どれだけ考えても手詰まり、ですわね。

見なかったこと、にするのは簡単だ。目を、耳を、心を塞げばいい。
被害者の訴えも届けも出ていない以上、なかったものとして扱うこと、それが利口な方法だとは解っている。

それに相手は強大な組織。猟犬部隊をはじめ、グループ、スクール、アイテム…いくつもの下部組織がある。
本当ならばミカにも、ミサにも手を出させたくはなかった。でも、2人から
「「すでに、関係者、なのです」」
と言われれば、巻き込んでしまった当の本人からは何も言い返せない。そして一度関係者になったら、もう『無関係』では通らない。

ただのスキルアウトがあれだけ町に徘徊しているのも、深い闇の大元が残っているから。
わたくしたちは、ただ光に当たる場所にはい出てきた害虫を捕獲するだけ。
捕獲だけなので、すぐ保釈され数が減らないのは道理。なら彼らこそが、均衡勢力（カウンターバランス）というわけですの…

はがゆいですわ。

とある２２　ふり返ると大切な日常

「深夜の自主練、けっこう続けましたわね」
すでに定位置になった深夜の公園。休憩中に缶ジュース飲むのも、いつからか習慣になった。

ジュースは全種類制覇いたしましたが、変わった物しかなかったですわね。飲み慣れれば、この不思議ブレンドもまあ悪くはないですけれど。
飲み終えた缶を、くずかご内にテレポート。うん、１００発１００中。
最初はくずかごの捨て口に落とそうとして、失敗しましたわね…懐かしいですこと。

平日の夜はもっぱらここで能力や体力を磨いてきた。
人目に付かない植樹の下、その地面の一角は鉄矢で開けた穴で綺麗に窪んでいる。

「レベルも４のまま変わりないですが、テレポートの事、つかめてきましたわ」

窪みにあわせて、同じ位置に鉄矢を飛ばす。
位置がズレないか、スピードを上げて飛ばして検証していく。手持ちの鉄矢を撃ち尽くすこと１０セット。次は自分が移動しながら１０セットと続けていく。

最初やりすぎてしかられた後、鉄矢を使うのを途惑ってしまった。
でもそんな場面でも、いまでは当てることなく無力化できることが増えた。

ジャッジメントで、とても役に立ったと思う。捕り物中無事に終わることが多くなり怪我することも少なくなって、初春を心配させる回数も同じく減った、と思う。

2人同時に止めた時は、固法先輩は胸を揺らして驚いていましたわね。丁度目の前で、じっくり見てしまいましたの。
堪能いたしましたわ、お姉様にもわたくしにも見られないビッグウエイブですからね。

…初春は心配したけれど。あの子はいつでも相手のことを気にしすぎ。優しすぎるのですわ。
心配はスカートと背後の人物にすべきですの。パンツはいてなければ、どうするつもりですの。
まあ、毎回堪能いたしますが。お姉様短パンですし。

ああ、体力作りは役立ちましたが、背も胸もこれっぽっちも変化なしとはどういうことですの。
お姉様と同じサイズになれば、下着の貸し借りなどできますのに！
（できません）

いろいろ思い出しつつも、淡々とメニューをこなす。
「そろそろ時間かしら」

公園の時計を見て、確認。
汗をふき、ストレッチをして、鉄矢を拾う。

結局アポーツ（取り寄せ）は出来ずじまいでしたわね。
それができれば離れたところから、お姉様のあれやこれを電撃を気にせず入手できましたのに。残念ですわ。
目の前で試したときは、まるで変態を見るような目で見られました

が…あふん。そんなお姉様も素敵でしたわ。

お休み前の夜は、お姉様と目一杯スキンシップをしましたわね。
一方的に触り始めたら、お姉様もノってくださって逃げずに反撃されて、お互いにこそぐり。負けん気お強いお姉様は自分からはお止めにならず、もうやりたい放題！息も絶え絶えになるまでしましたわね。

お姉様はこそぐりだと思われたようですが、甘いですわ。あれは、脇のお肉を触りたかっただけですの。あれなら電撃無く触り、触られ放題でしたもの。

私の策士！天才！新世界の神になる！なんて欲望全開フルバーストで狂喜乱舞でしたわ。
そのあと、ほんの少し手がおイタをしただけですのに、お姉様はホックがはずれたブラを押さえて涙目で電撃…ああ、わたくしったら！つい！！でも、悔いはございませんでしたわ！あの感触。一生の宝ですの！

お休みの日は、初春、佐天さんを含めた４人でショッピング、おしゃべり、スイーツ食べ歩き。かしましく、賑やかでしたわね。
佐天さん、初春にそのおぱんつは早うございませんこと？それにめくる前から中身が判ってしまっては、つまらないでしょうに。

あ、わたくしのお薦めはそのＴフロントですのよ。たまに前方にいるお方が見るに最高のサプライズプレゼントになること受け合いですわ。

頭に花を載せた清純なおっとり少女が、一瞬縄か！と思わせるいかがわしい下着を着けているという、想像をかき立てる背徳感を味わえる逸品。

え、マニアックすぎですの？難しいですわね。あ、お姉様『ゲコ太バックプリントのカラフル7色セット、毎日がゲコ太日和』はさすがにお止しになったほうが…

上条さんもわたくしも、その絵をみるとお医者さまから「若いうちこそ、自制すべきだよ」なんて声聞こえそうで萎えましてよ。「根性で性交に成功」なんていったらすごいパーンチでぶっ飛ばしますの。

ミカ、ミサ。あの子たちは遠慮していたけれど、お姉様にお会いさせたかった。そして、素顔で皆と町中一緒に遊びたかったですわね。金髪もカワイイですけどね。ナース姿ですし。いやら…ではなく、いやされますわ。ええ、本心からでしてよ。

何とはいいませんが、ちなみに縞ではなく白です、純白です。そんなとこまでナース服とあわせなくともよろしいのに。

そこは自由ですのよ。今度わたくしの私物を持って行って、指南せねばなりませんわね。

そうそう、先日の黒こげカナミンスーツ、それをまとって外出するつもりでしたの？

お姉様には見つかってもミカ、ミサとばれませんけど、わたくしと間違えられて電撃くらいますからおよしなさい。

え、電撃くらうようなことしたのかですって？…身に覚えはございませんわね。ですわよ。

そうそう、お姉様と上条さんは、まだ距離は変わらないご様子。今度、仲を取り持ってさし上げましょうか。

写真一枚では、夜も大変でしょうに。ベットの白地に金刺繍の修道服の幼女に手を出される前に、ムラムラする気持ちを解消しませんとね。

ケンカするのも愛情表現の一部ですし、まだお姉様はそのほうが緊張せず楽しそうですものね。

アレイスターとの契約なんて無粋なものではなく、お世話になったお礼もございますし。

お姉様の幸せは何にも代え難い大切なものですわ。

まあ、少々妬けますけども、ね。…ほんの少々だけ、ですけど。

まるで、いつまでも居られるような考えをしていたのに気付いて、ちょっと苦笑。

この体は黒子さんのもので、いつまでも借りられない。わかっていたことだけど。

この時がずっと続くといいのに。

大切な、とても大切な、日常。

とある２３　激憤　（前書き）

残酷描写があります、ご注意下さい。

とある２３　激憤

ミカとミサから見せたいものがある、と連絡があった。
メールに添付できないもの、たとえば着ぐるみを使った変なギャグでも考えついたのかしら。なんて軽い気持ちで、彼女たちのいる病院までむかう。

「えっへん、とミ、カはいばりんぼ、です」
「ミサ、も協力したので、手柄は半分こ、と主張、します」
そう言って、２人ともノートパソコンの画面に１枚の映像を写しだした。

むき出しの脳の部分にコードが大量に突き刺さったお姉様の複製体。

「怪しい箇所を、引き続き、漁って、いたらミサと見つけましたとミ、カは、続けます」
「これは、ミサ、たちが、特に調査すべき、モノだと思い、ミ、カとまとめて、あります」
映像データのタイムスタンプを見て、呼吸が一瞬止まった。ここ最近の日付。２００００を超えたナンバー。
中止していたはずのクローンがまた使用された、とミカに告げられた。
大脳地図（ブレインマップ）研究所の位置は、すぐ判明した。わざわざ実験結果を公開しているほど程度の低い、裏というには貧弱なただの予算の少ない

研究所の実験だそうだ。
だからこその低価格なクローン実験なのだろう。さらに悪いことにクローン制作管理者が何人も、レベル６シフト実験終了に伴い解雇されていることが後押ししている。
情報も、予算も、クローンの材料まで学園都市内に流出しているのだ。
外部からの人間が増えたためか、予算のせいなのかセキュリティ管理も甘く、その写真外のデータも入手したとのこと。
すでに３体使用して、結果が出ずに潰してしまったことへの言い訳と、研究資金が潤沢にあれば高度な研究が行えうるとの援助を求める内容が、その論文に諸々まとまっていた。
そんなところ、のさばらせてはいけない。これ以上お姉様や、妹達に不幸を見せたくない。

意思のないお姉様の表情…そして、頭に刺さっているいくつものケーブル。
その映像をじっと見ていると、目の前が真っ赤になる。

…これは、耐えられないっ

頭がずきずきする。

な　　なんで！

体が小刻みに震え出す。

あ、あああ頭が張り裂けそうだ！！！

吐きそうだ。

「場所は、どこですの…」
「ここ、です」
画面に表示された地図を見せられる。…覚えた。
「ちょっと、用事が出来ましたの…」

気付くと、コチラを心配するような何かを言っていたミカとミサを置いて、1人で研究所の建物内にいた。
写真と違わぬ機器。
…そして、廃棄用の袋の中に捨てられていたお姉様と同じ色の、同じ長さの髪の束。無造作に置かれた、頭蓋骨の一部。

響く警報装置。ガードマンの怒声。

頭の中には、さっき見せられた生々しい実験映像がループする。
お姉様の顔をしたクローンが、頭から繋がったケーブルに信号が送られる度に、泣いたり、わらったり…

おねえ、さま

ケーブルの繋がった頭はむき出しで、信号が強いと泣き叫び、情報が多いと狂ったようにわめき出す。

お　おねえさま

そして、電力の過負荷で身もだえした後の、意思の抜けきった死んだような濁った目。お姉様と同じ顔なのに、涎をたらす開ききった口元。

おねえさまっ　おねえさま！おねえさま！

そんな　けんきゅう　するのが　かがく　なの

なぜ　こんな　ひどいことを　あなたたちは　できるの？

クローンだから、と懲りずに人体実験をする狂った研究者たち

それを取り締まれないジャッジメント、アンチスキル…

思い出すのは、血まみれの屠殺場の細いトンネル
思うのは、平穏だけ。たった、それだけなのに
嗚呼…生かしておいたら、また実験を繰り返す…
これからいったい何人のお姉様をいたぶり、殺し続けるの？
思い出すのは、屠殺場の細いトンネルの幾重にも塗りたくられた、
黒ずんだ染み
能力…そんなに能力を知りたいの？
なら…その身で知ればいい…

監視カメラも、ガードマンも、警報装置も、見かける度に手近にあったものを同軸座標にテレポートさせてぶつけ、内部から破壊していく。
そのうち周りを人で囲まれた。何か言っているようだけど、耳に届かない。

禁忌にしていた　単純なテレポート
簡単に倒れていく　人の形をした　けだもの
空から　落ちてつぶれて咲く　赤い肉の塊

頭から椅子が生えて動かないモノ
めり込んだ壁に生えた足
機器と一緒に爆発し、ミンチになった肉片
阿鼻
目の前にいたら、金属片を脳に飛ばし、
触れたら、そいつを空や、壁の内部に飛ばす
叫喚
ただ、それだけ。
当たらないように、狙われないように、ただ自分の位置を移動させては、繰り返した。
屠殺場の細いトンネルのように、淡々と研究所を塗り替える。

とある２４　激憤２　（前書き）

残酷描写があります、ご注意下さい。

とある２４　激憤２

中央の部屋には臺が立った女研究者が、脳がむき出しになって動かないシスターズを溶液から退かし、ぶつぶつ呟き次の生け贄への準備をしていた。
「はあ、この素体もすぐに潰れちゃったわね。次を早く作らないと実験が止まっちゃうじゃない」
こちらを見ずに命令する。
「廃棄の手配は終わったの？」
口元に染みついた嫌みの皺が性格を端的に表現している。そして返答がないことに気付き、ようやくこちらを見る。
「子供が入り込んでるわよ、誰も止めなかったの？ほんと役立たずばかりね」
眉をつり上げ、口元の皺がより深くなる。
手に持ったケーブルを無造作にコンソールの穴に挿していくが、絡まったケーブルに苛つき端末を蹴り飛ばす。
「予算がないと、無能しか集まりゃしないわ、クソッ」

「いつまでつっ立ってんのよ。早く出ていきなさいっ！こっちは忙しいのよ！！」
手を動かすのを止めずに、口汚く吐き捨てるように言ってくる。

「無駄なこと、およしになったら？」

「な、なんですって！？ガキにこの実験の何が解るって言うの。ガードマン、早くつまみ出しなさい！！」

「ですから、無駄と申し上げているのです。ガードマン達はおりませんの。貴方で最後です。これで実験も終わりですのよ」

返り血の付いた私の服にようやく気付いたのか、狼狽する女。

「え…な、なんて奴ッ」

こちらを睨み付けて言う。

「私の崇高な研究の足をひっぱりに来たのね！低俗な俗物どもには貴重な実験の重要性が解らななんて愚昧にも程があるわ！予算もこれっぽっちなんて最悪。機材もモルモットの数も足りないというのに、邪魔ばかり。うっとうしいから早く出て行きなさい！！」

一方的に口汚く罵る女。会話にもなりはしない。

溶液から出され脳がむき出しになって動かないシスターズの1人。

その足下の膨らんだ死体袋を見かけるとあの事件を思い出し、吐き気がする。

「やかましい、ですわ」

「子供のくせに、大人の邪魔はしないで！誰に躾けられたのか知らないけど、人を殺しまくって平気なの！？常識を疑うわね！」

「…さえずるな」

「あ、暗部の人間をよくもコケにしたわね！！！表の世界の子供風情が身の程知らずめ！！」

「人の言葉をしゃべるな、獣が」

自分の我がまま通すだけなんでしょ。

会話、聞く気なんてないんでしょ。

一緒だね。

だから、　死ね

赤い花が、一輪、咲いた。

もう死んでいるのは一目見ただけで解っていたけれど、頭蓋骨が欠損し、むき出しの脳を見せているシスターズたちの死亡を確認。
間に合わなかった償いにもなりはしないけれど、せめてもの手向けに薄く開いていた目を閉じさせた。

五体満足なモノなど無い、人の残骸の中心に立って叫んだ。
目玉が流れ落ちるんじゃないかってくらい、涙が止まらなかった。

＜裏＞が、強いって誰が決めた？
＜表＞が人を殺さないって勝手に決めつけるな！

ごめん、黒子。あなたは悪くない。貴方の大事な信念は汚れてない。
でも、私の心は、この手はもう…

とある２５　狂敵

その後、私たちの周りの世界は急速に動き始めた。

「ミ、カとミサ、の周囲を、嗅ぎ回る、人物が複数人、います」
「いま、も、院外の、駐車場に、２名。患者として、紛れ込んで、いる者１名、を、確認して、います」
「この、間の、ハッキングの、進入経路、に、問題が、あったとミ、カは、推測、します」
「やはり、あそこ、は、回避すべき、でしたと、ミサ、は褒めて、もらえる機会を、失い、がっくり、します」

病院周辺での不審な事件が発生。まわりが怪しくなってきたと報告をうけ、ミカとミサの綺麗に治った手を繋ぎ一緒に病院からテレポートし、抜け出した。
お世話になったカエル顔の医者にご挨拶をしたかったのだけれど、後回しだ。
ジャッジメントの情報で、現在使われていない犯人たちのセーフハウスの数カ所に、目星をつけておいた。それが役に立つ。
その１つに見つからないよう細心の注意を払って、何度かのテレポートで移動した。

私物がほとんど無かった２人は、ノートパソコンと着替えが少々入ったバックしか持っていない。
そこからミカがなにやら機械を出して、手渡してきた。

「ミ、カはくろ姉、の、言っていたもの、作れましたと、おおいば

りで、渡します」
「機能的、には、貧弱ですが、最低限の動作は、保証しますと、共同で開発したミサ、はミ、カの説明に、おおいばり、で付け加え、ます」

「約束覚えておいででしたのね。感謝いたしますわ」
手製の小さな機械と、以前きなこと間違えて吸ったことのある睡眠薬を渡された。
長く使われていなかったセーフハウスを掃除し始めたとき、部屋の壁が大音量の爆発し、衝撃が走った。

「子猫ちゃん、ココにイタのか。」

「だ、…誰ですの！？」

「＜スナッチ＞ソレが朕らの呼び名ダ」

破壊され煙の舞うセーフハウスの壁を突き破り、進入してくる数人の男達。
その先頭にいる小柄な紫髪の男がそう言った。

「研究所の件、なかなかハデにヤッテくれたな。行動が目に余る約束を守らナイ子猫ども、朕らがお仕置きに来てヤッタぞ」
銃をもった黒服数名。そして、ホストのような男が、先頭の小柄な紫髪の男の後ろから出てきた。

そこで聞こえる不協和音…キャパシティダウン！？
逃げなくては！咄嗟にポケットの中の小さな物のスイッチを入れ、
ミカとミサの腕を掴む。
テレポート！

瞬間、自分の中に浸食してくる『何か』

「「朕の獲物だ、逃げるナヨ」」
頭の中の『何か』と小柄な紫髪の男の言葉が、重なる。
その間も『何か』は私の精神を浸食し、同化してくる。
「ああ、あああああ、やだ、いや　だ」
「「くろ姉！」」
微量の電気を流され、我に返る。
だめだ、だめだ、ここにいては捕まる、まずい、にげなきゃ！
私の中の『何か』が妨害してくるが、無理矢理テレポート。

それほど距離は稼げず、セーフハウスの建物からはまだ逃げれない。
その程度で血の気が引き、足に力が入らない。

「ちっ、逃がシタ。距離が遠かっタか？」
「テレポートか。面倒くせえ能力だがよ、キャパシティダウンが効いてんだ。いまなら大したジャンプにならんさ。ここいらを片っ端から壊していけば出てくるぜ」
「了解。散開して目標物を発見する。」
向こうから男たちの声がする。

『何か』は、離れたようだ。あぶなかった。
そこで頭の中から出てくる知らない記憶と情報。

『何か』の断片から読み取るに、奴も『憑依』だったのか…
そこで、精神を乗っ取ろうとしたとは。

精神しかない自分にとって、その攻撃はまさに全存在の消去。あまりの奇怪さにあとから震えが来る。
「大丈夫、です、か、くろ姉」
ミカがそっと抱いて、心配している。
「あ、ありがとう、ミカ…助かりましたわ」
その間、こちらを心配する視線を何度もむけつつ、ミサは周囲の警戒をしていた。

とある２６　記憶

乗り移られたときに残った奴の記憶を集めれば、何か解るかもしれない。
震えが止まり体が回復するまでの間、ミカとミサには周囲を警戒してもらう。

一呼吸して、覚悟を決める。頭の中の自分ではない記憶…

何があるのか…

ごちゃごちゃしてるな…憎い…痛い…怖い…？…ここじゃない…もう少し集まっているところ…こっち…深く…集中して…

俺の…記憶？計画？プログラム？

俺が疑似ＡＩ（上条トレース）だって…！？

上条さんとよく話が合う。

だから、って。

男ベースの考えなのも
未経験でむっつりなのも

そういうこと…？

複製ではなくトレースなのは、上条さんの右手の力に邪魔されて正確な模写・複製人格ができなかったからだって！？
秘密裏に行われた監視下での、彼の今までしてきた様々な状況判断。
平行して行われた行動推移予測による誤差修正を経て、プログラムを組み上げられた疑似人格ＡＩ…

それが、俺？

まさかっ！！

どこの学校だったのか？え？家族構成は…だって、あれ？記憶しか持ってない俺が、その記憶が作られた物だとしたら、いったい何を信じれば…違う世界から来たんだから、ここでは何も証明できるものなんて、ない、この世界の未来を知っている俺の記憶だって、未来予測のできるツリーダイヤグラムの計算で弾き出されたものだとしたら、ＴＶを見て知っていた知識、元いた世界の情報、憑依状態に都合がいい意識改変、それも作られたのだとしたら…

やばい、頭が混乱する。
目の前が暗くなる。
音が遠ざかる。
倒れそうだ。

吐き気が　する

「く、くろ姉、大丈夫、ですか！？」
「しっかり、して、ください、目を、あけて…」

ああ、遠くからミカとミサの声が聞こえる…

完全なる未来予測装置、高性能な並列コンピューターなどと言われる樹形図の設計者（ツリーダイアグラム）、
一般には気象予想程度に使われていたが、制作者死亡のうえ実物破壊されたからとしても試作品や、補修パーツなど全くないとはありえない。

科学が超進化したこの世界で、一度作られ世に出回った物が、複製できないはずもなし。
だいたい設計図や製作過程のパーツがあれば、リバースエンジニアリングでも逆アセンブルでもして、分解・解析で同じ物はできる。
まして数年前のスペックなど、真似るのはたやすい。
人工衛星に入る程度の容量・エネルギー使用率なら、たとえ寮の部屋の片隅に置いてあったとしても不思議じゃない。
そうなると、ツリーダイヤグラムがないほうが可笑しいくらいだ。
窓のないビルなど、最も怪しい。

占用のために破壊をでっち上げて隠匿したと言われた方が、信用できる。
同じ物でなくとも、もしくはその性能に匹敵する物は存在しているだろう。
滞空回線（アンダーライン）の情報収集を管理するのだって、それ用の演算処理器があることだし、それがツリーダイヤグラムと性能が同じでも納得できる話だ。

それがあれば、可能なのか…

その前提で思考を進めるのなら、ヒューズ＝カザキリのごとくＡＩＭ拡散力場の集合体を疑似人格とみなし、置き換え、
ミサカネットワーク（ＭＮＷ）のバックアップを超高度並列演算処理器（ツリーダイヤグラム）で補い、処理し、
第３候補（サードプラン）として利用できる。

奴は死んだ人間の能力さえも保持させることが出来る。
＜スナッチ＞も
紫の髪の子供も

クローンの再利用さえも！

…全部リサイクルもいいとこだな。

御坂美琴をサポートして、上条当麻を鍛えるための上条版絶対能力進化（レベル６シフト）実験に使ったってことか。

あのときに約束させられたのも、予測どうりってわけか。

ミカやミサと会ったことまで計画の範疇なら、道化もいいとこだ！

アレイスター！

そのためにどれだけの犠牲を払うつもりなのか…

一方通行（アクセラレータ）の時には２万人のお姉様のクローン

なら、今回は…

なんて、狂った世界だ！

そんなことが、頭をめぐる。

近くで男達の慌ただしい足音が聞こえだした。

とある27　死戦　（前書き）

残酷描写があります、ご注意下さい。

とある27　死戦

「はあ、っく、はあっ、はあっ」
息がきれる。髪が乱れ、血の混じった汗が目に入る。体中が痛い。
ミカとミサに作ってもらったきなこ粉（睡眠薬）はぜんぶ使い切った。
鉄矢も、太ももには1本も残っていない。
あの写真でさえ目くらましではなく、相手の首や目、脳、心臓など重要器官に飛ばして相手の命を絶つのに使い切った。
瞬間跳躍で逃げながら、手当たり次第のものを飛ばす。
さらに何人かの黒服にとどめを刺した。
あと何人残っている…？
何度もテレポートして痛み出した頭を振り、正気を戻したところで死体の横を通り、敵を捜す。
あと何回連続でテレポートが使えるだろう…。頭痛が酷くなり、しゃがんでしまった。
その時ふと、足を捕まれた。
え！？
小柄な紫髪の男が黒服をまとって、死体の中に隠れていた。
罠…？しまった！！
小柄な紫髪の男に、再び触れられた。
そのとき紫髪の男は、糸の切れた人形のように倒れた。そして進入

してくる、奴。
「捕まえタ。さっキから朕の頭上をエロイパンツでひらひらと逃げまどいやがっテ。ここまで朕の手を煩わせてクレるとはナ」
ああ、体は急成長させられたようだけど、少しは面影がある。でも、その表情は誰の人格だ！あの子じゃ、ない。
こいつ、は…同じ憑依する者。
体を乗っ取られる！
「ミカ、ミサ、逃げてっ！」
「オマエも、改良された朕の礎となるがイイ」
脳に異物が入ってくる。
体のコントロールをができず、動けない。
「やめろ、奪うな！乗っ取るなっ！」
憑依され、意識を奪われながら、やつの感情が、記憶が、情報が、混じってくる。
また、か…負の感情が…俺を覆う…
「くろ、姉！」
「大丈夫、で、すか！」
異変に気付いて近寄ってくるミカとミサ。
ゴバッ
その２人と黒子の間の床が消滅した。
あれは…未元物質？

まさか！

「ようやく追いついたぜ。俺からここまで逃げるなんてムカついた。優しくしてやろうと思ったけどよ、止めだ」

そう言って背後から勢いよく不可思議なモノを出した。

強制的に憑依され動けない私を庇い、逃げられないミカとミサ。その場に立ち止まり、それを電気分解で対抗しようとする。

「はっ…早く、そこからお逃げなさいっ！」

「だめ、です。ミ、カたちは、動きま、せん」

「ミサ、たち、なら、壊れてもよいから、くろ姉がにげ、て、と最後のお願いをミサ、は…」

バカ言ってんじゃないの。

せっかく生きながらえたって言うのに！垣根帝督、なんでお前が出てくるんだよ！！お前は＜スクール＞だろ！

近寄りさえすれば、３人ともテレポートで逃げるのに！

憑依のせいで頭がかき乱され跳躍の次元座標が歪み、計算が狂う。

これでは能力がっ…

「テメエのせいで、第２候補（スペアプラン）が後回しにされるんだそうだ。第２ってだけでムカついてたんだぜ、こっちはよ。だから形振り構ってらんねえんだよ！」

レベル１程度の電撃がとぎれとぎれにしか出せない２人。

それでも、能力のいっぱいだって、解ってる。

それなのに、レベル5に、未元物質に抵抗なんて自殺行為もいいところじゃない！
無理しないで！そこにいては駄目っ！お願いだから、早く逃げて！！

見ているだけで、
皮膚がちぎれる。
腕が割れる。
でも、痛いなんて言わない。
電撃で抵抗する。

「どうして、そこまで耐えるのです！早く2人だけでもっ！」

「体は、治せば、よい、の、です。とミサ、は言い切り、ま、す」
「あれだけ、壊れても、生きて、いたので、きっと今回も、大丈夫とミ、カは、楽天的」

「まだしゃべれるのかよ、ポンコツの割に、頑丈じゃねえか」
「や、やめろ垣根っ」
「オマエの相手は朕ダゾ、無視すんナよ」
「ぐっ　があぁ」
憑依浸食が進んでいく。体が、動かない。逃げられないっ！

「ミサ、たちの、記憶がとんだら、覚えていて欲しいのです。くろ姉にお願いします。だから、安心です。せっかく、なので、妹達（シスターズ）に、この勇姿みせつけて、自慢して、やりたかった、と」
「ミ、カも、同感、です、くろ姉、に、教えてもらった、姉の、意地と、して」

毒、熱、酸、あらゆる害悪を内包した未元物質が、2人を包んで崩壊させてゆく。

「ミ、カ、あとは、任せ　　た　」
「ミサ、任さ、れた、とミ、カ、は　　」
手を伸ばして助けようにも壊れていく2人の体を、ただ見ていることしかできない。
やめて！2人にひどいことしないで！
「はっはは、テメエらじゃ、どう足掻いても俺にゃ何ももできねえんだよ。素直にくたばっちまいな！」
「朕はコノ体のコントロールを奪った。オマエの抵抗もココまでダナ」
「あっ！あああああっ！！」
上条さん…。あなたのように、相手をぶっ飛ばせるだけの力は、俺にはない。
相手を説得して、曲がりきった性根を戻してやることもできない。
あなたの性格トレースなのに、不甲斐ない。悔しくて唇から血がにじむ。
でも、あきらめることだけは、選べない。
白井黒子のプライドにかけて！
私がここにいるから2人がやられていく、だから、うごけ、うごけ！うごけええ！！
念じても力を入れても腕までコントロールを奪われ、指先と視線くらいしか、もう動かせない。そこまで憑依浸食は進んだのか。ならば…

俺の思考を読み取るために同調したあいつを逃がしはしない。
体は黒子さんのものだから、指の１本でさえ、使い潰すわけにはいかない、でも心は俺のものだから、くれてやる！
そのかわり、お前も道連れだ！！
集中力が乱され使えないテレポート能力を、同調した相手の思考ごと強制的に１１次元に跳躍させる。何度も、何度でも。出口の計算なんてしない。ランダムテレポート。

跳躍　跳躍　跳躍　跳躍　跳躍　跳躍

空中に連続して出現する。瞬間、乱れていく出現場所。空中に飛び出たときの跳躍と跳躍の間の自由落下は、まるで紐なしバンジー。
内臓が揺さぶられる。

その間にも、かつてミサだったものは、半分ほどしかない黒い消し炭の塊になっていた。

かろうじて動かせる視線で捜すと、ミカの体も１１次元の瞬間跳躍から戻る度に崩れ、裂かれ、焼かれ、潰され、なくなっていく。
ミカは、もう、話すこともない。
頭が、床に落ちているのだから。
焦げ付き、残った片腕からまだ微弱な電撃が脊髄反射で出ていた。

ミカ！ミサ！
叫びたかった。逃げ出したかった。でも、それは出来ない。
復讐、弔い、どんな理由を付けてでもこの存在は塵一つ残してはおけない！
こいつを放置すれば憑依して黒子さんとお姉様を使い、上条当麻が狙われる。

上条がレベル６になるまで、周りの親しい人が何人犠牲になるんだ？
レベル６シフトの為のシナリオ、冷酷で陰惨な策が頭に流れてくる。
歯を食いしばって、心ががりがり削られるのを耐える。
体は、大丈夫。こんなことで、壊れてなるものか。
黒子だって、俺だってこの日のために鍛えてきた。
たかが、１１次元に乱数をリアルタイムではめ込んでいるだけだ。
お前だけの現実なんぞに左右されてたまるかよ！

きお、くが　ぶれる
まるで　あのひ　こっちに、きた　ときのよう　だ

不協和音の聞こえる方向を捜す…どこだ…どこ…だ　あった　　こ
こ…なら…

壁が壊れたセーフハウスの部屋にテレポートアウトしたとき、掴もうにも動かない腕を無視してポケットに入っていた小さな機械を指先にとばす。
スイッチを切り、すかさず動作中のキャンセラーをカットし、キャパシティダウンにこの身をさらす。
乗っ取るだけに食い込んだお前の精神を、一緒につぶしてやる！くらえっ！！

高周波が全身に浴びせられる。能力をもったものほど効く暴虐の嵐に、精神だけの存在など一溜まりもなかった。
「「がっあああぁ」」
意識が散り散りに飛ばされ、消えていく。

アレイスター！お前の望みはこれだったのか！
所詮は廃案、ここで纏めて使い潰して、見せしめにするつもりか。
だから、俺をここに呼んだんだな。お前の計画に乗ってやる！
道化の演技は完璧にこなしてやる。だがな、裏切るなよ。

せめて、俺の手の中の人たちだけは…。

美琴お姉様、黒子さん、ごめんなさい。

とある28　約束

ミカ、ミサ。

おまえたちの　＜魂＞　は、俺と一緒だ。

プログラムだから

体細胞クローンだから

そんなのどうだっていい。俺は、たしかにここにいた、おまえたちも、ここにいた。それだけだ。

「やーーメーーろーーー」

ここで、わかれても、　一生、覚えておく！絶対に！約束する。

「うガアあああアーー」

だから、寂しくなんて、ない。　ほんとだ。

「きえ　キえルーーー」

自分で選んだ行動なんだから、後悔なんてしない。

「朕が　キえ　　」

この目から出てる涙は、会えて嬉しかったからだ！

「ァぁ　ぁ　　」

かなしくなんて、ない。

「　　」

涅槃だろうが、ＡＩＭの混沌の中であろうが、プログラムの片隅だっていい。

幻想だとしても構わない。その幻想だけはぶち殺させたりしない！

だから、またいつか、会おう！絶対だ。

とあるＦＩＮＡＬ　まだ見ぬ未来へ（Ｄｅａｒ　Ｍｙ　Ｆｒｉｅｎｄ）

突然の匿名電話で、黒子のことを聞かされた美琴。
相手の声は普段なら信用に値しないほど不自然な合成音であったが、脇目もふらず一目散に指定された病室に向かう。
悪戯や嘘でもなく、入院していると言われたとうりに、そこには病室のベットで寝ている親しい後輩の姿があった。

「黒子…！」

電話の内容を思い出す。短い内容だ、一言一句覚えている。
黒子の症状、理由、原因については告げられなかった。
ただ、この病院の指定された部屋に入院している、とだけ言われたのだ。

黒子の外観は、特徴的なツインテールがやや乱れているほか、包帯も傷口も見あたらない。治療は済んでるのだろうか？
美琴は自らの能力で黒子の体内の生体イオンの状態や、微細な臓器振動などをスキャン。
皮膚、内臓の小さな裂傷や体内の打撲痕などは多数あったが、手術を要する怪我はなさそうだと確認し、一息つく。
念のため巡回してきた看護師を呼び止め、患者の様態を尋ねる。気を失ない意識混濁状態ではあるが、検査結果では体に異常はない、と聞かされた。

「しばらくしたら、目が覚める…か」

そう言われたら、体から力が抜けた。予想外に緊張していたようだ。
しばらく黒子の寝顔を見て目覚めを待っていたが、寝ている間は予想以上に長かったため、その間じっとしていられなくて病院内をまわり、医師や看護師に色々聞き回った。
結果、路上に倒れた女性がいると同じような音声で匿名の電話があったことしか情報は得られなかった。
最近の黒子の変わった行動と何か関係があるのかもしれないと、美琴の心に不安は広がっていく。
「いったい、何があったの」
疲労の跡がうっすら残った黒子の寝顔をみながら、頭の中でどう問いただそうかと思う。
また、はぐらかされるかもしれない。
「強情なんだから、黒子は…」
乱れたツインテールの毛先を手櫛で直し、そう呟く。
この愛すべき後輩は、周囲に心配をかけさせるのを極端に嫌う。何事もないような顔をして無理をしている姿さえ秘密にする、プライドの高い強情な子なのだ。
そうなると何をしようが、黒子からは一切話さないだろう。
ならば他の手段、非合法なことをしてでも、黒子がここまで無理をした理由を知りたかった。
目覚めるまでの間、関係者の洗い出し、謎への調査解明にハッキン

グを含めた経路、手法など止めどなく思案し続けた。

夕日で病室が朱く染まり始めた頃、ベッドの上で横になった少女の目がゆっくりと開いた。

「黒子、起きたのね」

「ああ、お姉様…」

この声、この雰囲気…違う？いえ、戻った！？

「もう、おはようって時間でもないわよ、黒子」

つとめて軽めになるよう話しかけた。

「お姉様ったら、わたくしもそれくらい承知してますわ」

「そう、よかった」

本当によかった。記憶も、性格も普段の黒子だ。

「わたくし、なにか長い夢をみていたような気がします、の。明日になったら、きっとこの夢も忘れるでしょうから、いまお話しいたしますわね」

黒子はそう言って微笑しながら、美琴を見ていた顔を天井の方に向け、ぽそぽそと話し始めた。

突然、見たこともない違う場所で目が覚めましたの。

そこで、高校生の男の体になっていたなんて、悪夢でしたわ。
能力で、いえ、なぜだか魔術にかかったように。

その世界にお姉様はいらっしゃいませんし。
ごく、ありふれた超能力も、魔術もない世界。
能力なんて使えない、ここと似たような、でもそうでない場所。

おかしなことに、その世界でも、夢が見られるんですのよ。
そこで見た夢の中に、お姉様や、お姉様によく似た私のことをくろ姉って、言っていた子がいて、

ずっと悩んで、

戦って、

守って、

気遣っていた人がいたんですの。

たしかに、いたんですのよ。
だって、

…

な、涙が　とまりませんの…
グスッ

長い独白の間、目に零れんばかりにあふれる涙を拭おうともせず、
美琴に顔を向けた。

「黒子…」

「お姉様」

「黒子、おかえり」

「お、　おねえさまっー！！！」

きっと明日になったら、この話は黒子の口からも、誰からも出ないだろう。
そして、今までの日常が続くのだ。

「でもそれは、自分で選んだ行動だから後悔なんてしない、でしたわね。心に刻んでおきますわ、もう一人の黒子さん。わたくしのお友達…」

黒子は美琴の両腕に抱かれて、そう呟いた。

ＥＮＤ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3785t/

とある白井黒子に憑依

2011年8月24日08時16分発行